鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（18）

主要地方道西之表・南種子線道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

牛之原遺跡（うしのはらいせき）

所在地　鹿児島県熊毛郡中種子町増田

1996年　3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　　文

この報告書は，主要地方道西之表～南種子線道路整備工事に伴い，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した，牛之原遺跡の緊急発掘調査の記録です。

牛之原遺跡は，種子島の中央部中種子町にあり，東海岸に面した増田地区の台地上に位置しています。古くから縄文時代早期～後期の遺跡として知られておりましたが，先の大戦中は，増田の飛行場として切り開かれ，現在は宇宙開発事業団のロケット追跡基地として活躍している場所でもあります。

今回の調査では，縄文時代早期を中心とした土器や石器が発見されましたが，中でも磨製石鏃は長さが5.5㎝と大型で，県内でも出土例の少ない貴重な資料となりました。

本書が多くの人々に活用され，歴史・文化研究の一端を担い，県民の皆様方の埋蔵文化財に対する理解を深めていただく機会となれば幸いです。

最後になりましたが，この発掘調査に御協力をいただいた県土木部・熊毛支庁土木課の関係者，および地元の方々に心より感謝の意を表します。

平成８年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長　内村正弘

報　告　書　抄　録

フリガナ	ウシノハラ　イセキ
書名	牛之原遺跡
副書名	主要地方道西之表～南種子線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	鹿児島立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	（１８）
編著者名	大久保　浩　二
編集機関	鹿児島立埋蔵文化財センター
所在地	鹿児島県姶良郡姶良町平松６２５２
発行年月日	１９９６年3月
フリガナ	ウシノハラ　イセキ
所収遺跡	牛之原遺跡
フリガナ	カゴシマケン　クマゲグン　ナカタネチョウ　マスダ
所在地	鹿児島県熊毛郡中種子町増田
市町村コード	４６５０１１　遺跡番号　８０－７　北緯　30°33″　東経　131°1′
調査期間	1994年８月２日～９月14日
調査面積	２５０㎡
調査原因	主要地方道西之表～南種子線道路整備事業

出土遺物・遺構等	主な時代	主な遺構	主な時代	主な遺物	出土量	特記
			縄文早期	塞ノ神式土器	１５０点	
				磨製石鏃	１点	長さ5.5cm
				打製石鏃	１点	
			縄文晩期	一湊式土器	１点	
				黒川式土器	１０点	
				打製石鏃斧	４点	
				磨石類	３点	

牛之原遺跡位置図（５万分の１）

例　言

1．この報告書は，主要地方道西之表・南種子線道路整備事業に伴う牛之原遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，鹿児島県土木部の依頼を受けて，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

3．発掘調査における実測図・写真は，井ノ上・前迫・森田・大久保が担当した。

4．写真図版３～図版７の撮影にあたっては，奈良国立文化財研究所牛島茂氏の協力を得た。

5．写真図版３～図版７は等倍である。その他の遺物写真は縮尺不同である。

6．遺物番号は，本文及び挿図・図版の番号と一致する。

7．挿図における土器の縮尺は，１／２である。

8．本書に用いたレベル数値は，すべて海抜絶対高である。

9．本書の執筆・編集は，大久保浩二が行った。

本文目次

序文

報告書抄録・位置図

例言

目次

第1章　調査の経過 …… 1

第1節　調査に至るまでの経緯 …… 1

第2節　調査の組織 …… 1

第3節　調査の経過 …… 1

第2章　位置と環境 …… 3

第3章　発掘調査 …… 7

第1節　調査の概要 …… 7

第2節　層位 …… 8

第3節　遺物 …… 16

第4章　まとめ …… 31

図版

あとがき

表目次

第1表　周辺遺跡地名表 …… 5

第2表　確認トレンチの調査結果一覧 … 7

第3表　遺物観察表(1) …… 25

第4表　遺物観察表(2) …… 26

第5表　遺物観察表(3) …… 27

第6表　遺物観察表(4) …… 28

第7表　磨製石鏃出土地名表 …… 33

挿図目次

第1図　周辺遺跡地図 …… 4

第2図　牛之原遺跡周辺地形図 …… 6

第3図　土層柱状図 …… 8

第4図　トレンチ配置図とグリット図 … 9

第5図　確認トレンチ土層断面図 …… 10

第6図　1区遺物出土状況と土層断面図 … 11

第7図　2区遺物出土状況と土層断面図 … 12

第8図　3区遺物出土状況と土層断面図 … 13

第9図　4区遺物出土状況と土層断面図 … 14

第10図　5区遺物出土状況と土層断面図 … 15

第11図　出土土器実測図(1) …… 18

第12図　出土土器実測図(2) …… 19

第13図　出土土器実測図(3) …… 20

第14図　出土土器実測図(4) …… 21

第15図　出土土器実測図(5) …… 22

第16図　出土石器実測図(1) …… 24

第17図　出土石器実測図(2) …… 24

第18図　出土土器実測図(6) …… 29

第19図　出土石器実測図(3) …… 30

第20図　南九州縄文早期の磨製石鏃 …… 34

図版目次

図版 1　遺跡遠景，遺跡近景 …… 36
図版 2　土層断面，出土遺物(1) …… 37
図版 3　出土遺物(2) …… 38
図版 4　出土遺物(3) …… 39
図版 5　出土遺物(4) …… 40
図版 6　出土遺物(5) …… 41
図版 7　出土遺物(6) …… 42
図版 8　撚糸文文様拡大図 …… 43
図版 9　出土遺物(7) …… 44

第1章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県土木部（熊毛支庁土木課）は，熊毛郡中種子町増田地内において，主要地方道西之表・南種子線道路整備事業を計画した。計画地内には周知の遺跡である牛之原遺跡が所在しているため，熊毛支庁土木課はその取扱いについて，鹿児島県教育庁文化課（以下県文化課）と協議した。

協議に基づき，平成5年7月，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）で分布調査を実施したところ，工事計画区域内に牛之原遺跡が所在していることを確認した。そこで，再度，県文化課，埋文センター，熊毛支庁土木課で協議を行った。その結果，埋蔵文化財の保護と事業の推進を図るため，周知の遺跡内は発掘調査を行い，隣接地については詳細分布を行うこととなった。平成5年度工事区域内は周知の遺跡の隣接地であるため，平成5年11月に詳細分布調査を行い，平成6年度以降の工事区域内については，周知の遺跡とその隣接地であるため，平成6年度に発掘調査および詳細分布調査を行うこととなった。報告書の作成は，平成7年度に行うこととした。

第2節　調査の組織

事業主体	熊毛支庁土木課		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	内村　正弘
	〃	次長兼総務課長	川原　信義
	〃	調査課長	戸埼　勝洋
調査担当者	〃	文化財主事	井ノ上秀文
	〃	文化財研究員	前迫　亮一
	〃	〃	森田　郁朗
	〃	〃	大久保浩二
調査事務	〃	主査	成尾　雅明
	〃	主事	中村　和代

報告書の作成に当たっては，遺物撮影において奈良国立文化財研究所の牛島茂先生の協力を得,撚糸文原体の観察で井ノ上秀文，中原一成氏の指導・助言を得た。記して感謝いたします。

第3節　調査の経過

平成5年度の詳細分布調査は，平成5年11月15・16日に実施し，平成6年度の発掘調査及び詳細分布調査は，平成6年8月2日～9月14日（実働24日間）に実施した。平成6年度の調査の詳しい経過については，以下の日誌抄をもって代える。

日誌抄　平成６年

８月３日（水）　所長あいさつ，発掘作業開始。１～５Ｔ設定掘り下げ。

４日（木）　２Ｔ塞ノ神式土器出土。３・４Ｔに溝状遺構（戦時中か？）。６Ｔ設定。

５日（金）　１ＴⅨ層下まで掘り下げ終了。５Ｔ岩盤。７Ｔ設定。

８日（月）　１Ｔ土層図実測。７Ｔ早期土器片１点出土。

９日（火）　２・３・６ＴⅨ層下掘り下げ。７Ｔ早期土器出土状況撮影，実測・取り上げ。詳細分布Ｓ１・Ｓ２掘り下げ。

10日（水）　５Ｔ土層図実測。２・３・４・６・７Ｔ掘り下げ。詳細分布Ｓ２・Ｓ３調査。

16日（火）　４・５・８・９Ｔ掘り下げ。２～４Ｔ実測取り上げ。全面調査区表土剥ぎ。台風14号によりプレハブ横転。

17日（水）　全面調査１区掘り下げ。３～５Ｔ土層図実測。３区表土剥ぎ。ベルコン設置。

18日（木）　６・８・９Ｔ掘り下げ。１～３区掘り下げ。１区に戦時中の溝検出，写真撮影。掘り下げ。

19日（金）　６・８Ｔ土層図実測。９Ｔ掘り下げ。１～３区掘り下げ。２・３区遺物出土状況写真撮影。４・５区表土剥ぎ。

22日（月）　９Ｔ掘り下げ。１～３区掘り下げ。１・２区遺物出土状況実測・遺物取り上げ。５区表土剥ぎ。

23日（火）　９Ｔ土層図。５・６・８・９Ｔ埋め戻し。１～３区遺物出土状況写真撮影。実測・遺物取り上げ。

24日（水）　１～３区遺物出土状況写真撮影。実測・遺物取り上げ。４・５区掘り下げ。

25日（木）　１～５区遺物出土状況写真撮影。実測・遺物取り上げ。

26日（金）　１～５区遺物出土状況写真撮影。実測・遺物取り上げ。

30日（火）　１～３区遺物出土状況写真撮影。実測・遺物取り上げ。土層図実測。４・５区Ⅳ層掘り下げ。

31日（水）　４・５区Ⅳ層掘り下げ。３・４区の残り表土剥ぎ。２区から晩期の土器出土。グリット配置図作成。

９月１日（木）　２区の残りⅢ層掘下げ。４・５区Ⅳ層遺物出土状況写真撮影。実測・取り上げ。詳細分布Ｓ３調査。

２日（金）　４・５区掘り下げ終了，清掃，写真撮影。３・４区掘り下げ。

５日（月）　２区残り部分掘り下げ終了。３・４区Ⅲ，Ⅳ層掘り下げ。５区南壁土層断面実測。

６日（火）　２区残り部分Ⅳ層出土状況実測・取り上げ。土層断面実測。３・４区Ⅳ層掘り下げ。打製石鏃と磨製石鏃出土。

７日（水）　３・４区Ⅳ層掘り下げ終了。磨製石鏃の基部出土。遺物出土状況実測・取り上げ。写真撮影。

８日（木）　３・４区土層観察用深掘り。土層断面図実測。

９日（金）　発掘区埋め戻し。道路面清掃。道具片付け。作業終了。

第2章　位置と環境

牛之原遺跡は，鹿児島県熊毛郡中種子町増田に所在する。

種子島は，鹿児島市の南方約116km，九州島最南端の佐多岬より40kmの洋上に位置し，南北52km，東西6～12kmの細長い島である。

地形は，丘陵性の山地，海岸段丘，河川付近の沖積低地からなり，最高所でも282．3mの平坦な島である。

地質は，中部以北に古第三紀層の熊毛層群が基盤岩となり，海岸段丘はこの熊毛層群を浸食して発達している。この熊毛層群を不整合に覆っているのが中部以南を中心にみられる新第三紀茎永層群で，一般に東に傾斜し，ケスタ地形を形成している。また，この茎永層群を覆っているのが上中層群で，島の中央部付近に広く分布し，基低に礫岩を伴い，中～上部は沙汰の悪い砂岩より成り，多くの偽層が発達している。

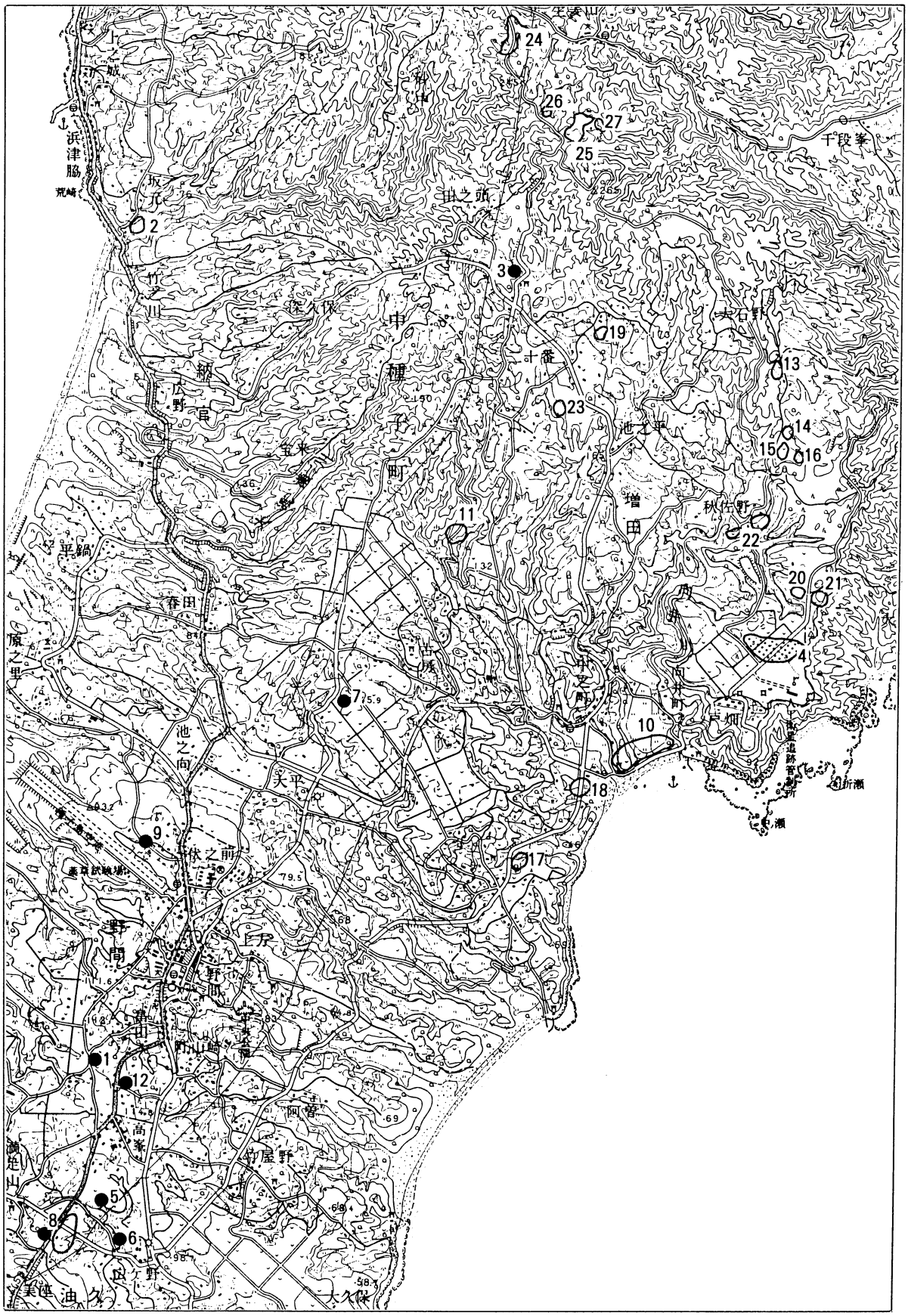
中種子町は，種子島の中央部に位置し，南北22km，東西7km，面積は．138.41km²である。地形は，海岸面に緩やかな丘陵を呈し，北部は山林地帯が多く，中央部から南部にかけては，海岸付近を除けばそのほとんどが丘陵性の台地である。海岸付近は，東側は海食崖で，西側は砂鉄を含む砂丘海岸となっている。牛之原道跡の所在する増田は，海蝕台地が絶壁をなし，奇岩が見られる町の東海岸に位置している。

縄文時代の周辺遺跡は，縄文時代早期では，奈佐田遺跡より吉田式土器・押型文土器が出土し，千草原遺跡・溝足山遺跡・竹屋野遺跡・高峯遺跡・輪之尾遺跡・田島遺跡等より塞ノ神式土器が出土している。縄文時代前期では，千草原遺跡・中田遺跡・田島遺跡・二十番遺跡等より曽畑式土器が出土し，千草原遺跡・大園遺跡より轟式土器が出土している。また，苦浜貝塚・女州遺跡・高峯遺跡・高田遺跡・千草原還跡・畠田遺跡等で，苦浜式土器が出土している。縄文時代中期の様相は今までのところ明らかにされておらず，熊毛諸島全体でも，西之表市国神大田遺跡で後期の指宿式・市来式土器と共に阿高系と思われる凹線文土器が発見されているだけである。縄文時代後期では，原尾遺跡・向町遺跡・大園遺跡等より指宿式土器が，原尾遺跡・中田遺跡・向町遺跡・阿高磯遺跡・大園遺跡より市来式土器が，原尾遺跡より松山式土器が，向町遺跡・伏之前遺跡・二十番遺跡・大園遺跡等より一湊式土器が出土している。縄文時代晩期では，阿嶽洞穴より黒川式土器が出土している。また，近年の発掘調査で，縄文創草期の状況が明らかになりつつある。砂中に位置する三角山遺跡（現在発掘中）では，隆帯文土器の土器片が発見され注目を集めている。

（森田郁朗）

《参考文献》

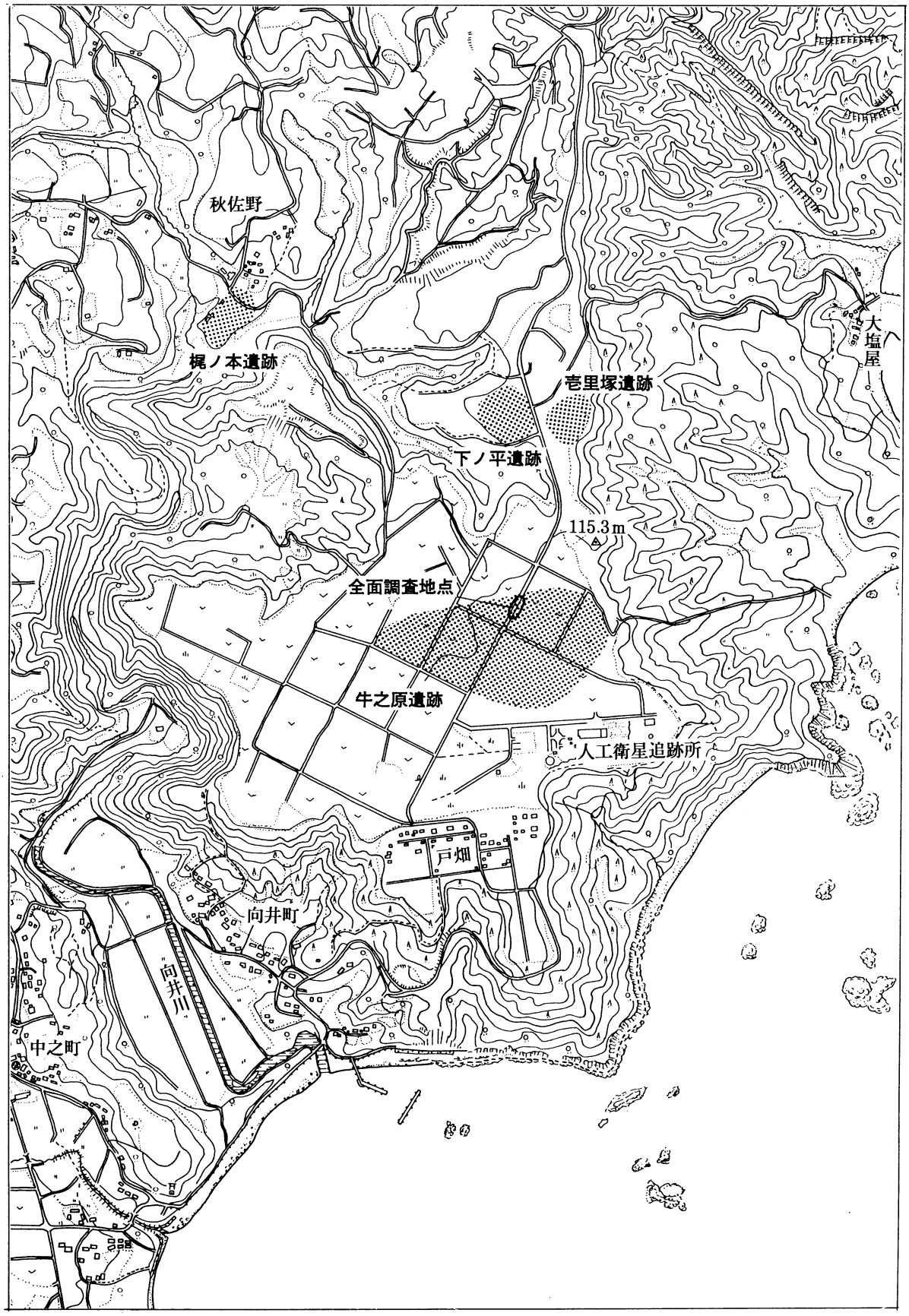
1．中種子町教育委員会「中種子町郷土誌」１９７１年
2．南種子町教育委員会「南種子町郷土誌」１９８７年
3．南九州縄文研究会「南九州縄文通信Ｎ０．８」１９９４年
4．鹿児島県教育委員会「鹿児島県遺跡地名表」１９７７年
5．中種子町教育委員会「鷹取・平松Ｂ・宮田・小牧野Ｃ遺跡」中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（１）



第１図　周辺遺跡地図（５万分の１）

第１表　周辺遺跡地名表

番　号	遺跡名	所　在　地	遺　物	時　代	遺　物　等
1	畠　田	野間畠田・明石牟田	平　地	縄(前)	苦浜式土器
2	大　園	納宮・坂元・大園	台　地	縄(前) 縄(後) 縄(晩) 弥(中)	轟式土器 市来式・一湊式・指宿式土器 黒川式土器 弥生式土器
3	二十番	増田・二十番・西川・原	斜面地	縄(早) 縄(後) 弥(後)	曽畑式・一湊式土器 磨製石斧・凹石・敲石 弥生式土器片・磨製石斧・敲石
4	牛之原	増田・向井町・牛原	台　地	縄(後)	塞ノ神式・苦浜式土器・磨製石斧
5	高　峯	野間・高峯・東牧掘	平　地	縄(前) 弥(後)	塞ノ神式土器・苦浜式土器 弥生式土器
6	満足山	野間・満足山	平　地	縄(前) 弥(中) 弥(後)	塞ノ神式土器・打製石斧 弥生式土器片
7	千草原	増田郡・原・千草原	台　地	縄(前)	塞ノ神式土器・轟式
8	伽羅角	野間・満足山伽羅角1,517-1	平　地	縄(前)	塞ノ神式土器・石皿
9	伏之前	野間・伏之前	砂　丘	縄(後)	一湊式土器
10	鳥の峯	増田・中之町・鳥の峯	砂　丘	弥(前) 弥(中)	完形弥生式土器・人骨
11	増田城跡	増田・古房・城ノ鼻	丘　陵	約1500年代末	
12	中種子焼釜跡	野間・大長野			
13	増田大石野	増田大石野	台　地	縄文早期	塞ノ神式・磨製石斧・石匙
14	大石野	秋佐野大石野	台　地	縄文早期	塞ノ神式・石皿・叩石
15	中野大石野	秋佐野中野大石野	台　地	縄　文	土器片
16	東松原山	秋佐野東松原山	台　地	縄　文	土器片
17	野間太郎坊	中種子町野間太郎坊	台　地	室　町	須恵器・青磁
18	下ノ園	中種子町増田下ノ園	砂　丘	縄文・古墳 室　町	縄文土器・青磁・土師器・成川土器
19	中平地	中種子町中平地	台　地	縄　文	縄文土器
20	下ノ平	中種子町下ノ平	台　地	縄　文	縄文土器・磨石・石斧
21	壱里塚	中種子町増田壱里塚	台　地	縄　文	縄文土器
22	梶ノ本	中種子町梶ノ本	台　地	縄　文 弥　生	縄文弥生土器・石斧・石皿・磨石
23	本願寺	中種子町本願寺	台　地	縄　文	縄文土器
24	三角山Ⅰ	中種子町砂中	台　地	縄　文 草創期	隆帯文土器
25	三角山Ⅱ	〃	台　地	縄文早期	吉田式・塞ノ神式土器
26	三角山Ⅲ	〃	台　地	縄文早期	縄文土器
27	三角山Ⅳ	〃	台　地	縄文早期	塞ノ神式土器・石斧



第2図　牛之原遺跡周辺地形図

第３章　発掘調査

第１節　調査の概要

平成５年の詳細分布調査は，当該年度工事計画部分の幅２～３ｍ，長さ180ｍの間に，８ヶ所のトレンチ（Ｓ１～Ｓ８）を設定して実施した。その結果，遺物・遺構等は確認されなかった。

平成６年度の調査のうち，周知の遺跡の隣接地の約480㎡については，４ヶ所にトレンチ（Ｓ９～Ｓ12）を設定して詳細分布を行ったが，遺物・遺構等は確認されなかった。

周知の遺跡内の約1000㎡については，９ヵ所にトレンチを設定し，確認調査を行った。各トレンチの調査結果については，第２表にまとめて示した通りである。１トレンチでは遺物が出土せず，２トレンチ・３トレンチで遺物が出土したため，その間に７トレンチを設定し，全面調査の範囲を絞りこんだ。１トレンチから北側や，５トレンチから南側では上部が削平されており，遺構・遺物は発見されなかった。

確認トレンチの土層図を第５図に示し，確認調査で出土した遺物は全面調査で出土したものに含めて扱った。

第２表　確認トレンチの調査結果一覧

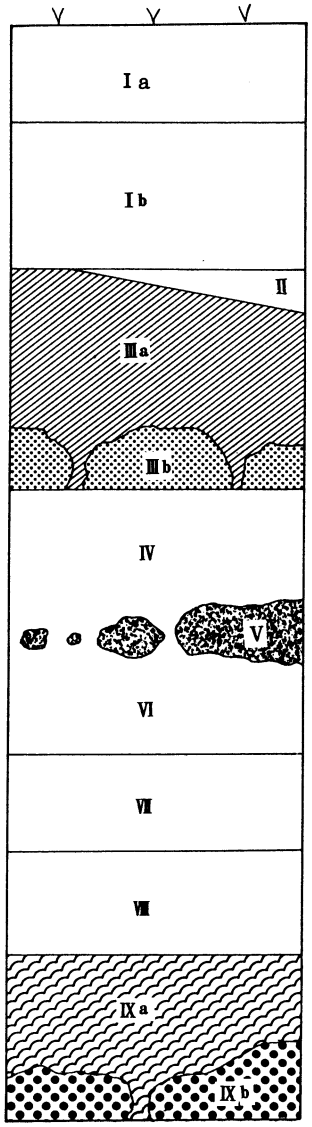
トレンチ番号	大きさ	深　さ	遺　構	遺　物	内　　容
1	１×５ｍ	1.8 ｍ	×	×	上部削平。遺構・遺物発見されず。
2	1.5 ×５ｍ	1.6 ｍ	×	○	Ⅳ層中より，土器出土。
3	２×４ｍ	2.8 ｍ	×	○	Ⅳ層中より，土器出土。
4	２×４ｍ	2.3 ｍ	×	×	遺構・遺物発見されず。
5	２×４ｍ	1.8 ｍ	×	×	下部に大きい礫。遺構・遺物発見されず。
6	２×４ｍ	1.2 ｍ	×	×	ＡＴ層近くまで削平。遺構・遺物無し。
7	１×３ｍ	1.4 ｍ	×	○	Ⅳ層中より，土器・石器出土。
8	２×４ｍ	0.9 ｍ	×	×	ＡＴ層近くまで削平。遺構・遺物無し。
9	２×４ｍ	1.2 ｍ	×	×	ＡＴ層近くまで削平。遺構・遺物無し。

全面調査は，確認調査で遺物が出土した２・３・７トレンチの周辺約200㎡について実施した。計画図面の県道センターにある№４の地点を起点として20ｍグリッドを設定し，１～５区とした。実際の発掘範囲は県道脇の歩道となる部分のみであるので，幅が２～３ｍほどの，狭くて長い調査区となった。

表土は重機で剥ぎ取り，その下の黒褐色土を掘り下げると，縄文時代晩期の土器片や打製石斧，磨石などが出土した。当初はこの黒褐色土層をⅡ層として遺物も取り上げていたが，アカホヤ層との境が漸移的でなく，明瞭に分層できることから，攪乱を受けた旧耕作土であると判断した。アカホヤ層の下のⅣ層からは，縄文時代早期の土器や石器が出土した。土器片は小片がほとんどで，調査区が狭いこともあり，接合するものはほとんどなかった。しかし４区からは，長さが5.5cmにもなる磨製石鏃が出土し，注目された。

第２節　層位

牛之原遺跡の層位は，以下のように確認された。



第３図　土層柱状図

Ⅰａ層　茶褐色をした耕作土である。

Ⅰｂ層　黒褐色の旧耕作土で，アカホヤ火山灰上部まで耕作され，攪乱した遺物を包含している。発掘調査の前半ではⅡ層として扱ったが，検討の結果，旧耕作土と判断した。

Ⅱ　層　暗茶褐色土である。１～３区では攪乱を受け，４～５区で堆積が認められた。

Ⅲ　層　約6300年前の鬼界カルデラの噴出物で，通称「アカホヤ」と呼ばれるものである。暗橙色でふかふかした感じのアカホヤ火山灰（Ⅲａ層）と，やや硬質で暗橙褐色のブロックと黄橙色の小パミスを多く含む，火砕流・降下軽石の部分（Ⅲｂ層）に分層できる。

Ⅳ　層　淡茶褐色土で，やや粘質を帯びる。縄文時代早期の遺物包含層である。

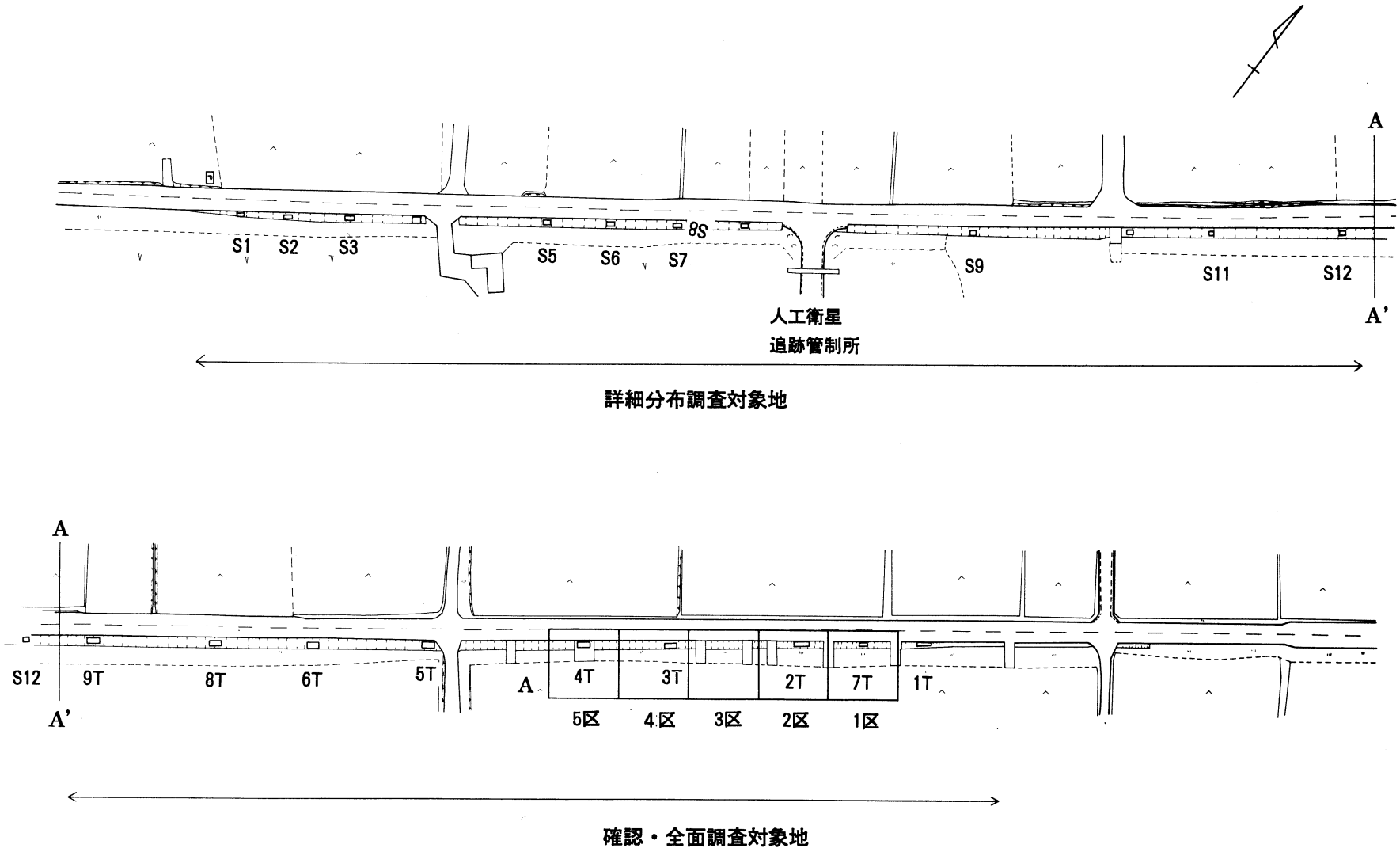
Ⅴ　層　黄褐色の火山灰と考えられる層である。粘質のない黄褐色土が，10～20cmの厚さでブロック状～層状に堆積し，上下の層の境も明瞭に区分できる。１・２区では確認できないが，３・４区では安定して堆積している。（薩摩火山灰の可能性が高い。）

Ⅵ　層　暗茶褐色土で，やや粘質を帯びる。Ⅳ層より色調が濃い。

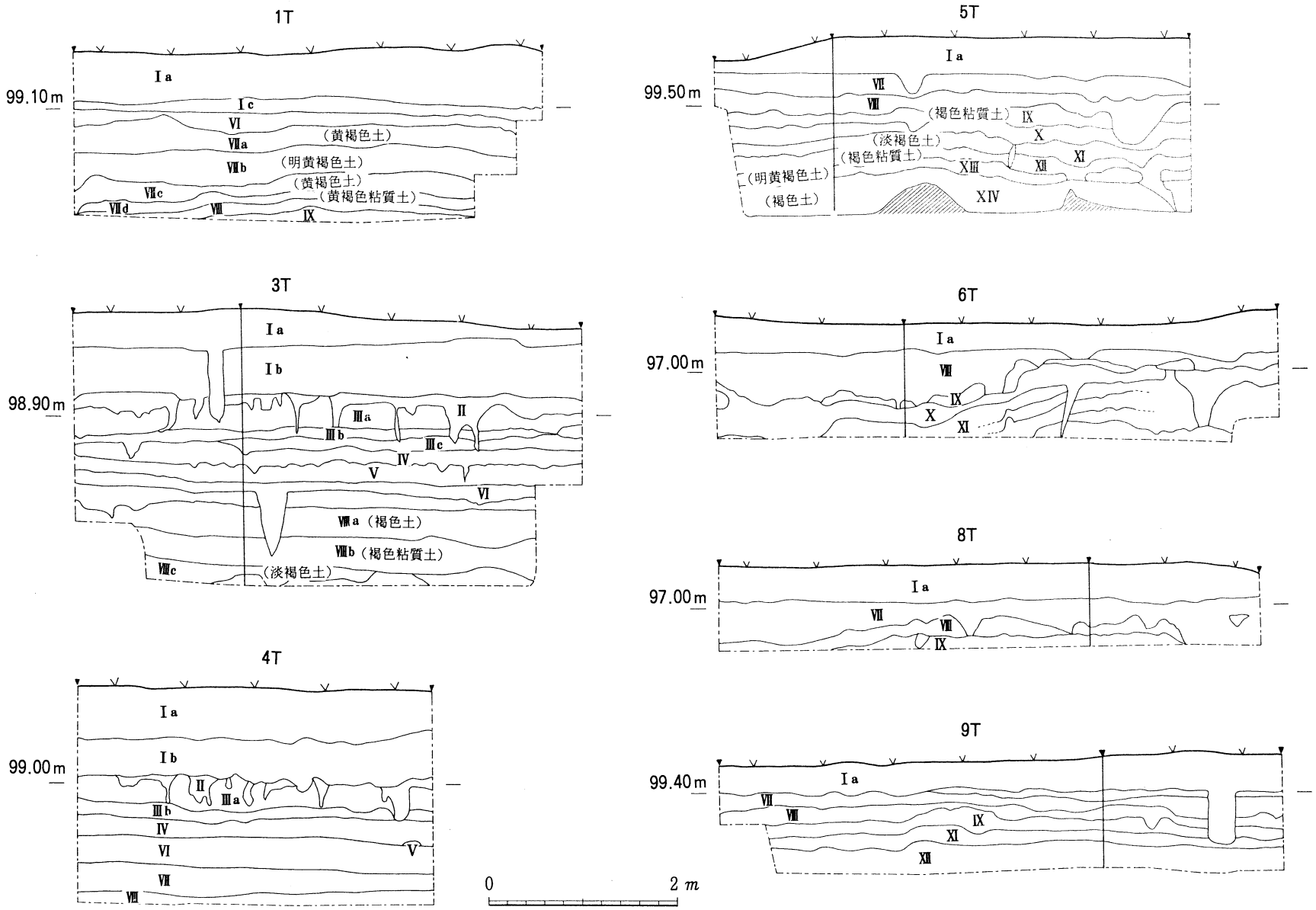
Ⅶ　層　淡黄褐色土で，やや粘質を帯びる。

Ⅷ　層　淡茶褐色土で，粘質が強い。

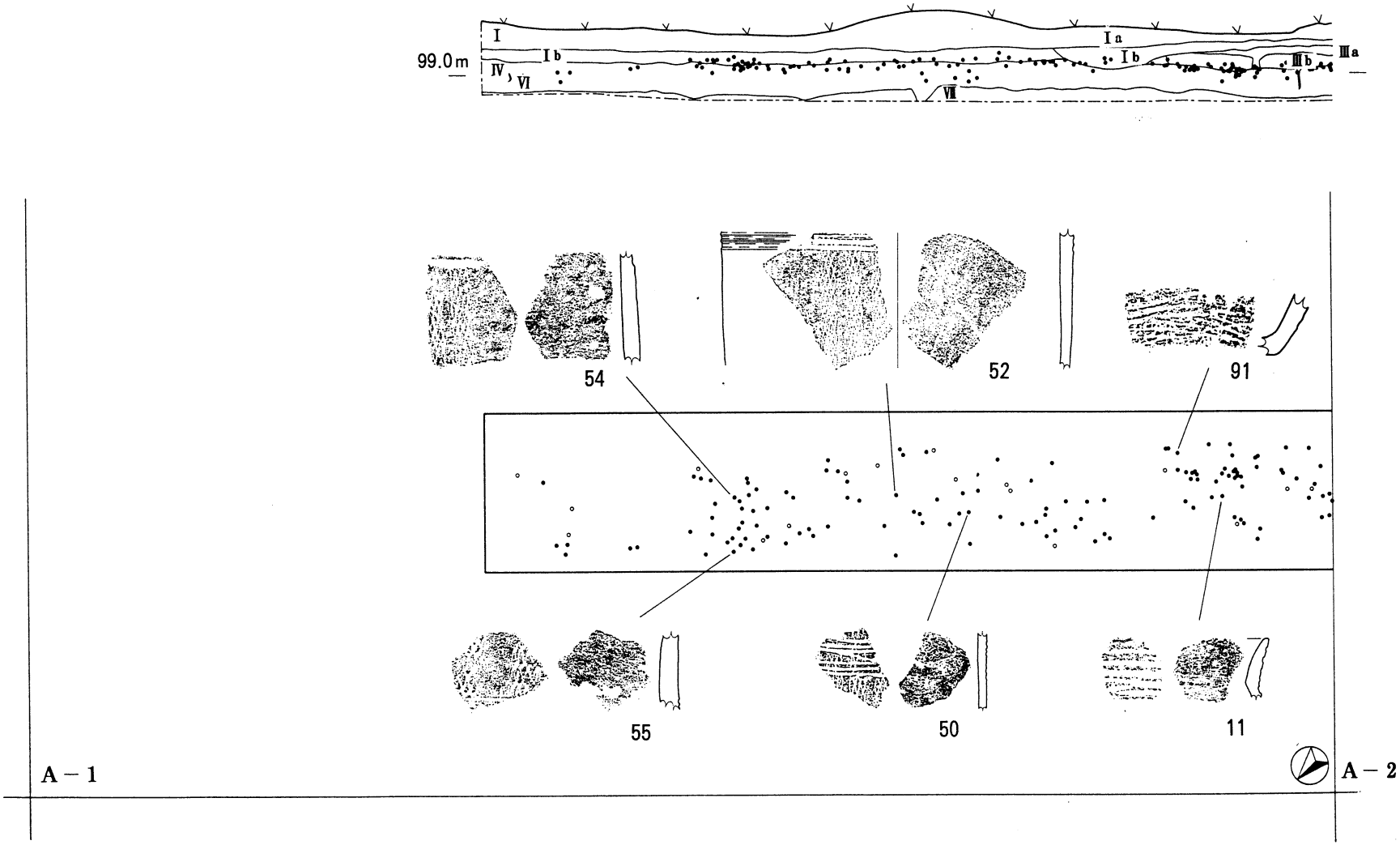
Ⅸ　層　明黄褐色火山灰土で，約2400年前の姶良カルデラの噴出物である。20～30cm程堆積しており，上部にはＡＴ火山灰，下部には大隅降下軽石が堆積している。



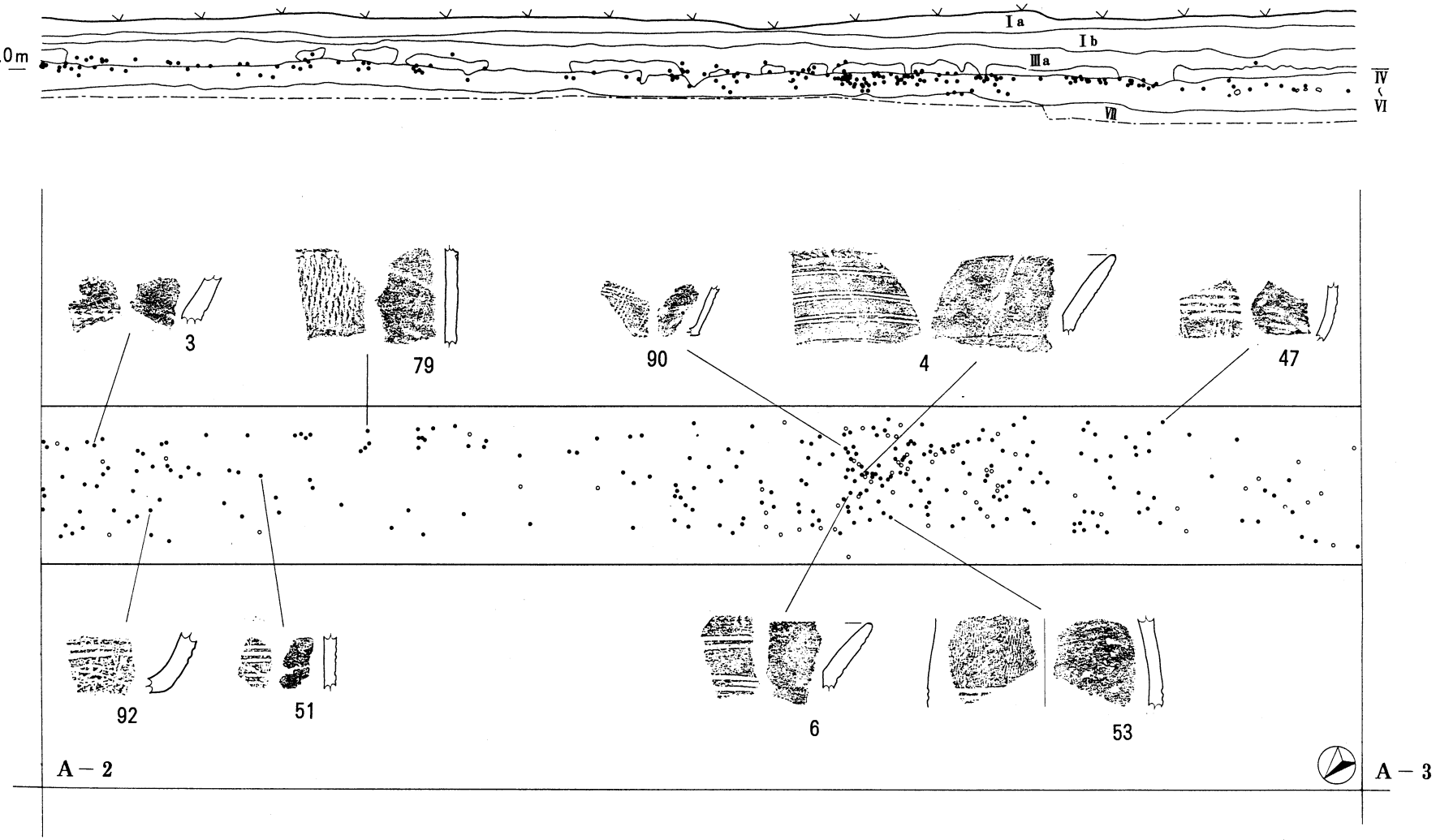
第４図　調査対象地（トレンチ配置とグリッド図　１／700）



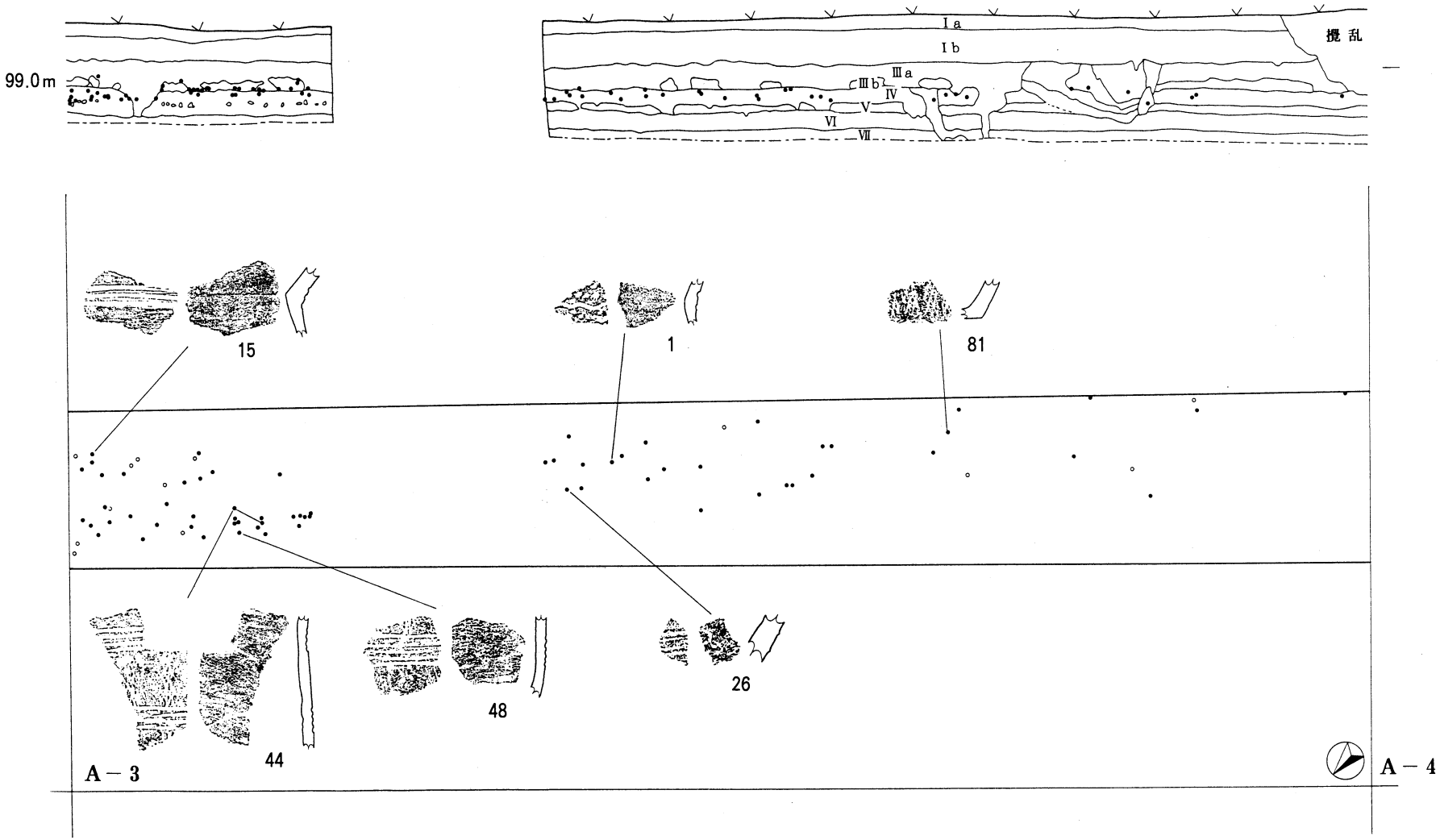
第５図　確認トレンチ　土層断面図



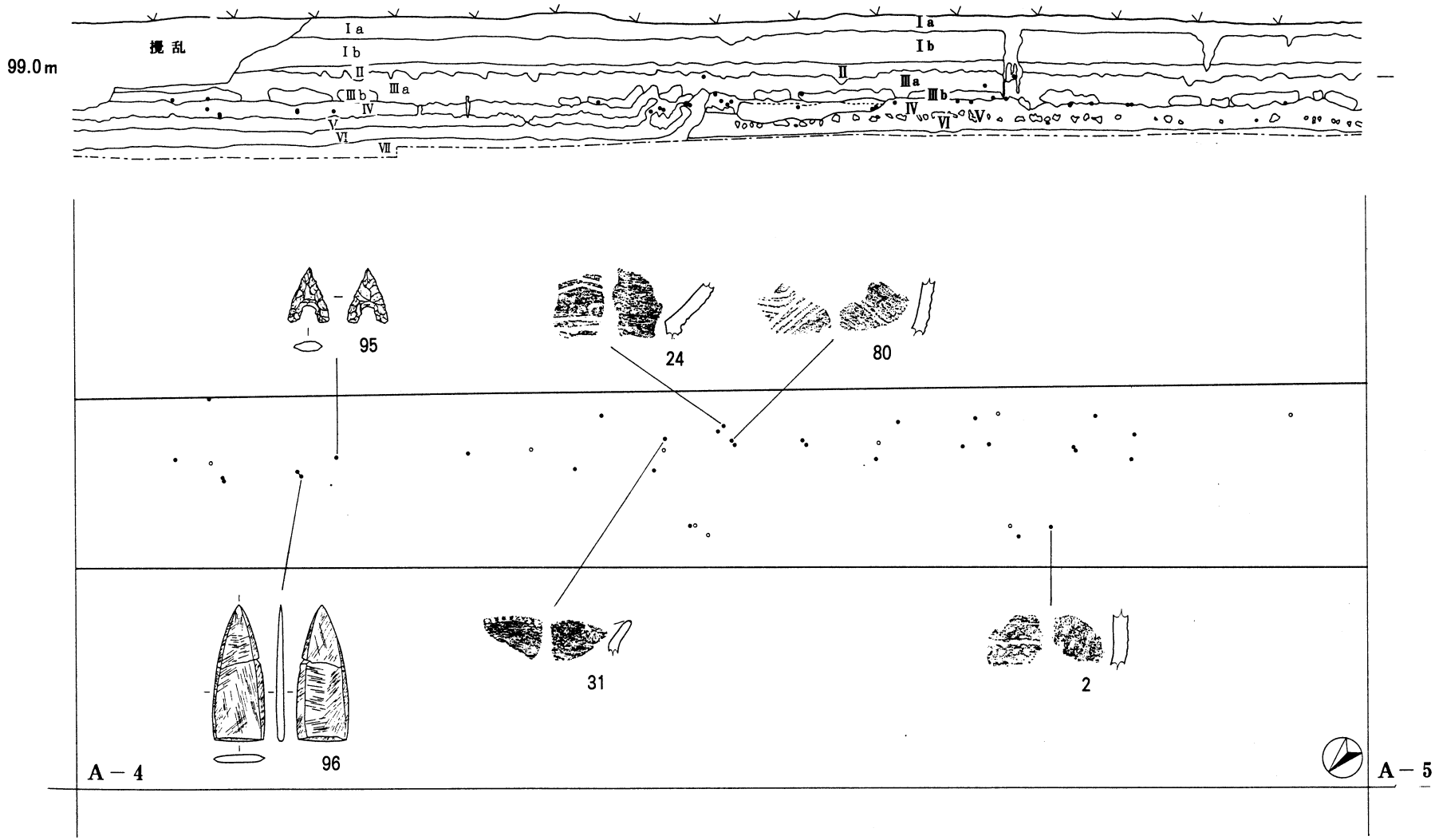
第６図　１区 遺物出土状況と土層断面図 垂直分布（20ｍグリッド）



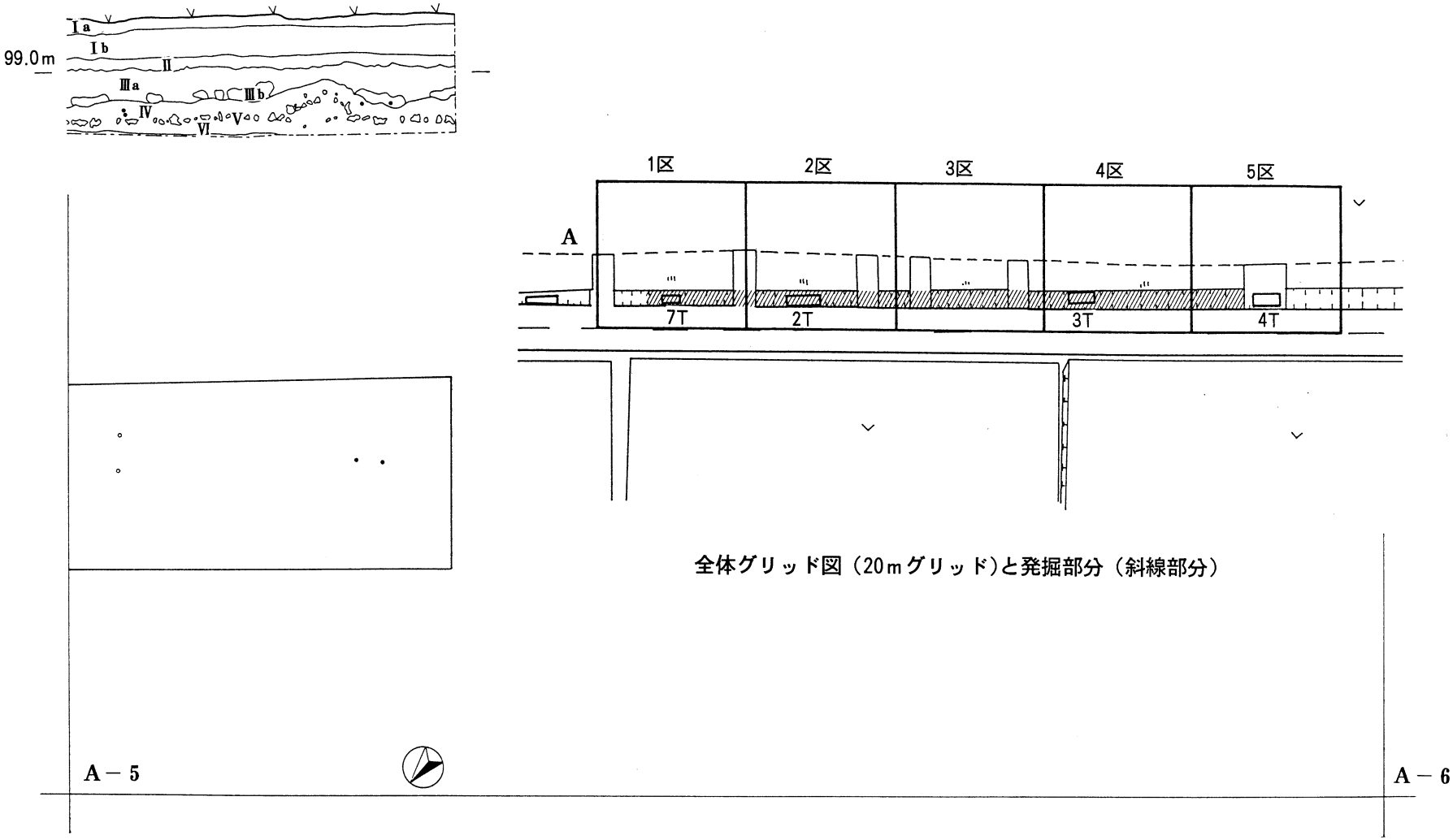
第７図　２区 遺物出土状況と土層断面図 垂直分布



第８図　３区　遺物出土状況と土層断面図　垂直分布



第９図　４区　遺物出土状況と土層断面図　垂直分布



第10図 5区 遺物出土状況と土層断面図 垂直分布

第3節　遺物

遺物の出土する層位は，第6図～第10図の垂直分布からもわかるように，Ⅲ層の鬼界カルデラ噴出物（アカホヤ）と，Ⅴ層の黄褐色火山灰にはさまれた，Ⅳ層を中心に出土している。そのⅣ層の中でもⅢ層に近いレベルのものがほとんどで，縄文時代早期に該当する遺物である。またこれらは調査区のほぼ全域から出土しているが，平面分布からわかるように，1区から2区にやや集中している部分が見られる。

旧耕作土を含む表層からは，攪乱を受けているものの，縄文時代晩期に該当する遺物が出土しており，表層の遺物として一括して扱った。

1．Ⅳ層出土の遺物（縄文時代早期）

(1)　土器

出土した土器は，すべて小破片であり，完形に復元できるものはないが，文様等の特徴から次のように分類した。

Ⅰ類土器　波状の沈線とその上に連点文を施すもの。（第11図1）

Ⅱ類土器　貝殻による連続刺突文を施すもの。（第11図2，3）

Ⅲ類土器　数条の並行沈線と撚糸文を施すもの。（第11図～第15図4～93）

その他の土器（第15図94）

Ⅰ～Ⅲ類土器は，器形的にはほぼ同じ形態を示すものと考えられ，平底の底部から円筒形の胴部となり，頸部で「く」の字に屈曲し，口縁部はラッパ状に外反するものである。

Ⅰ類土器（第11図1）

Ⅰ類土器は1の1点のみである。深鉢形土器の頸部であるが，屈曲部の稜線ははっきりしない。外面に波状の沈線文を1条巡らし，その上部に2段の連点文を施している。

Ⅱ類土器（第11図2，3）

2・3は，貝殻腹縁による横方向の連続刺突文を施すものである。2は部位と傾きが不明であるが，二叉状の貝殻腹縁で押し引くように連続刺突されている。肋の長さの違いから，沈線と連点文のように施文されている。胎土には金雲母を含んでいる。3は口縁部から頸部の破片であるが，3本の肋をもつ貝殻腹縁で，左から右方向へ押し引くように連続刺突されている。文様は2段確認できる。

Ⅲ類土器（第11図～第15図4～93）

Ⅲ類土器は，まず撚糸文が縦位に間隔をおいて施され，その上から数条の並行沈線文を巡らすものである。撚糸文は結節のない網目状撚糸文で，単軸絡条体第5類に分類されるものが大部分である。並行沈線はそのほとんどが横（水平）方向に巡らされているが，中には斜行するものや，曲線文を描くものもある。一組の並行沈線の本数は，小破片のため確定できないものが多いが，2～5本が単位となっている。

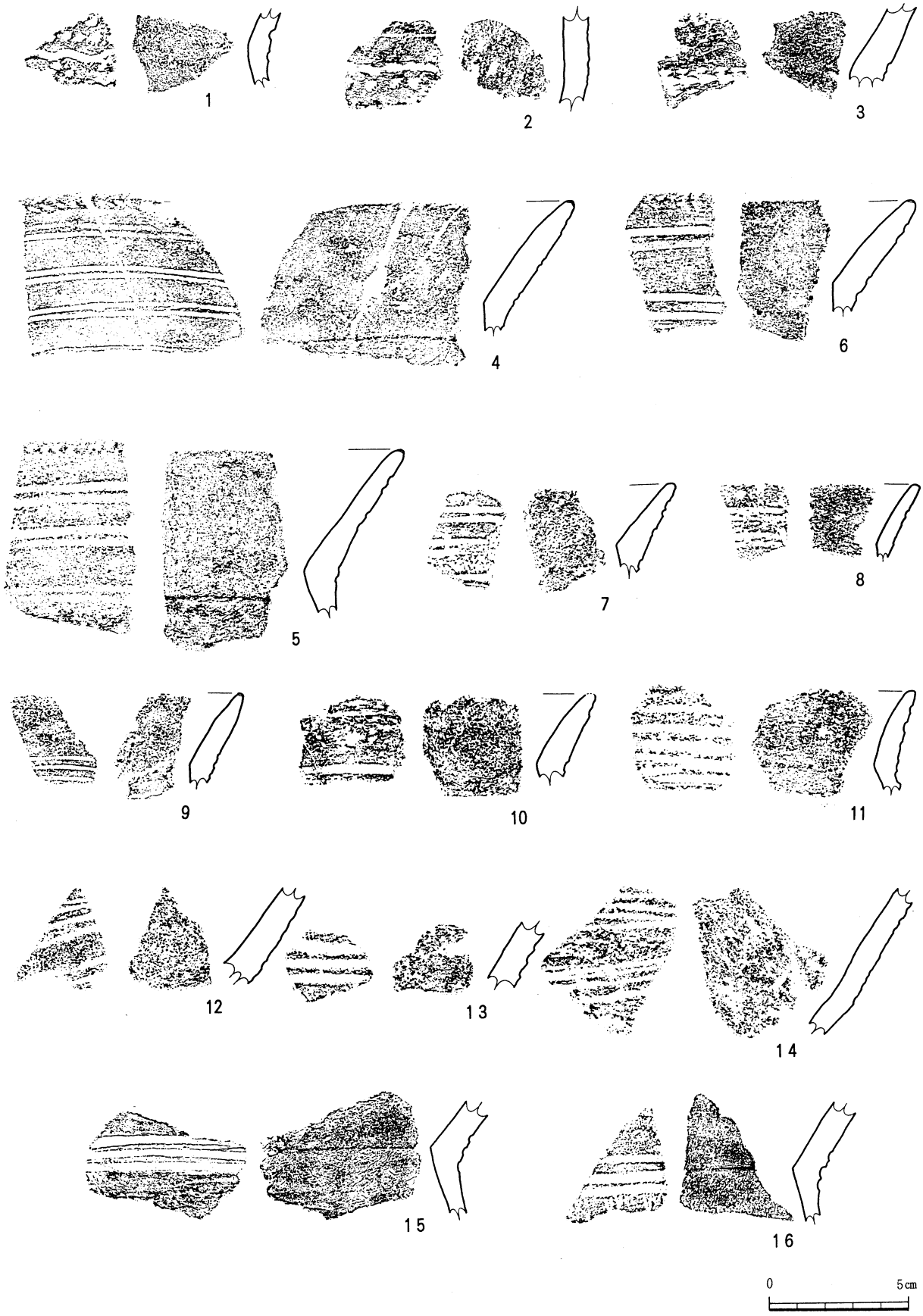
4～14は，口縁部から頸部の破片である。口縁はほぼ直線的に大きく外反し，外面には並行沈線が巡らされている。口唇部には刻み目が施されている。4～8は2本単位の並行沈線である。そして4・5の口唇部には羽状の刻み目が施され，6は斜めの刻み目である。4は胎土に金雲母を含んでいる。8は他に比べて薄手で屈曲も明確でなく，やや異質な感じである。9には3本の沈線が観察され，口唇部にはやや太めの刻み目が施されている。11～14は，やや荒い沈線文が施されている。11は少なくとも5本の沈線が施され，12は右

上がりに施されている。14は口縁であると考えられるが，傾きが不明である。

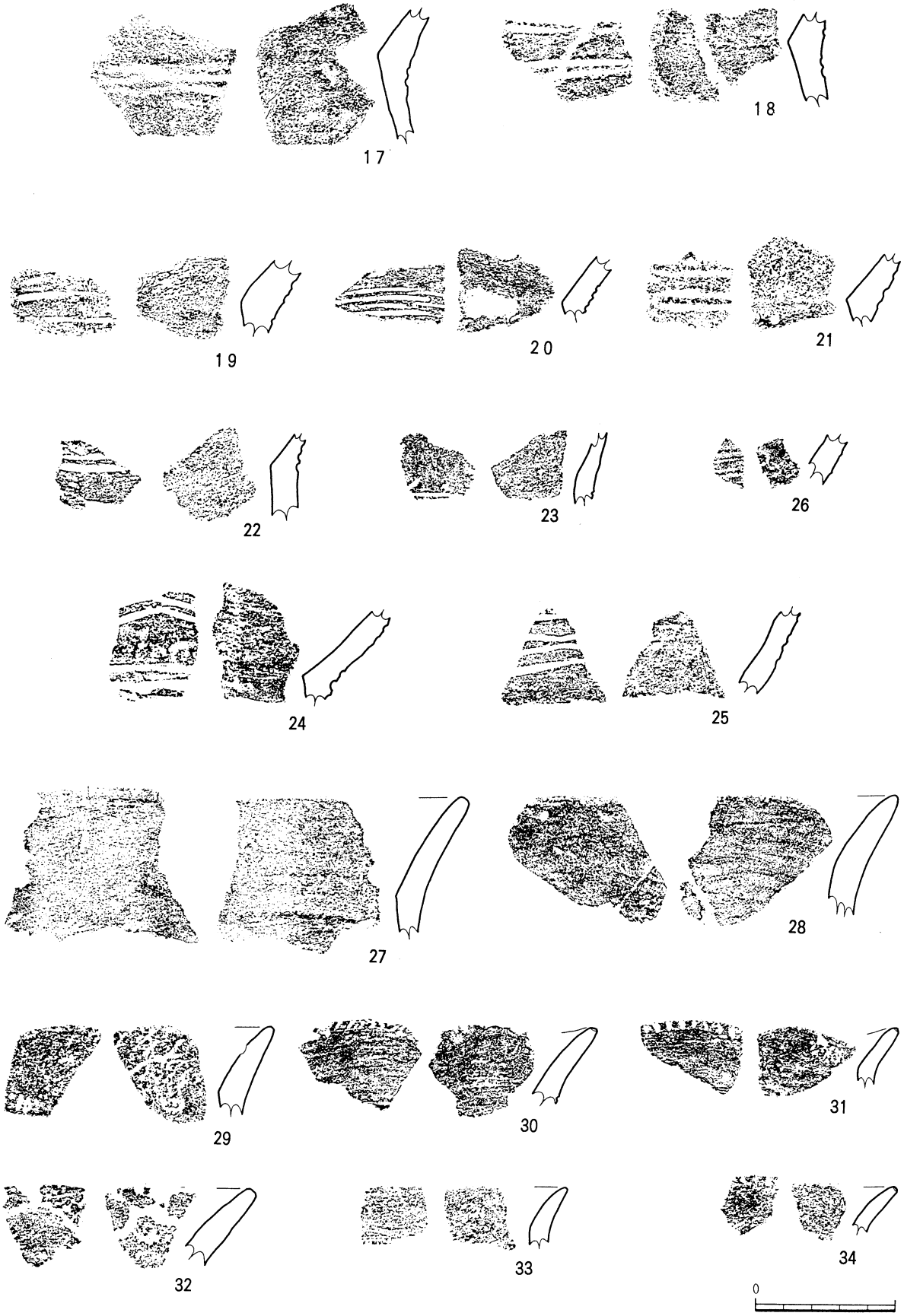
15～24は，「く」の字に外反する頸部の破片である。内面の屈曲部には明確な稜線をもち，頸部直上で肥厚するものがほとんどである。頸部外面には数条の沈線文を巡らしており，15～17は3本単位の並行沈線である。15・16は胴部に網目状撚糸文が施文されている。23は鋭い沈線文が施されており，屈曲も緩やかである。胎土には金雲母を含み，色調も赤褐色で，異質な感じを受ける。24は2本単位の並行沈線が，直線文と山形文を描いている。25と同一固体ではないかと思われる。26は口縁部の破片であるが，極細の粘土紐を貼り付けた微隆起文が，2段観察される。微隆起には刻み目が施されている。

27～34は，無文の口縁部である。ただし，口唇部には刻み目が施されるものがある。頸部内面の稜線は，27は明確であるのに対し，28は緩やかである。30・31は波状口縁を呈する。30は口唇部を平坦に作り，斜位の刻み目を施している。31・34は口唇部に直交する刻み目を施している。

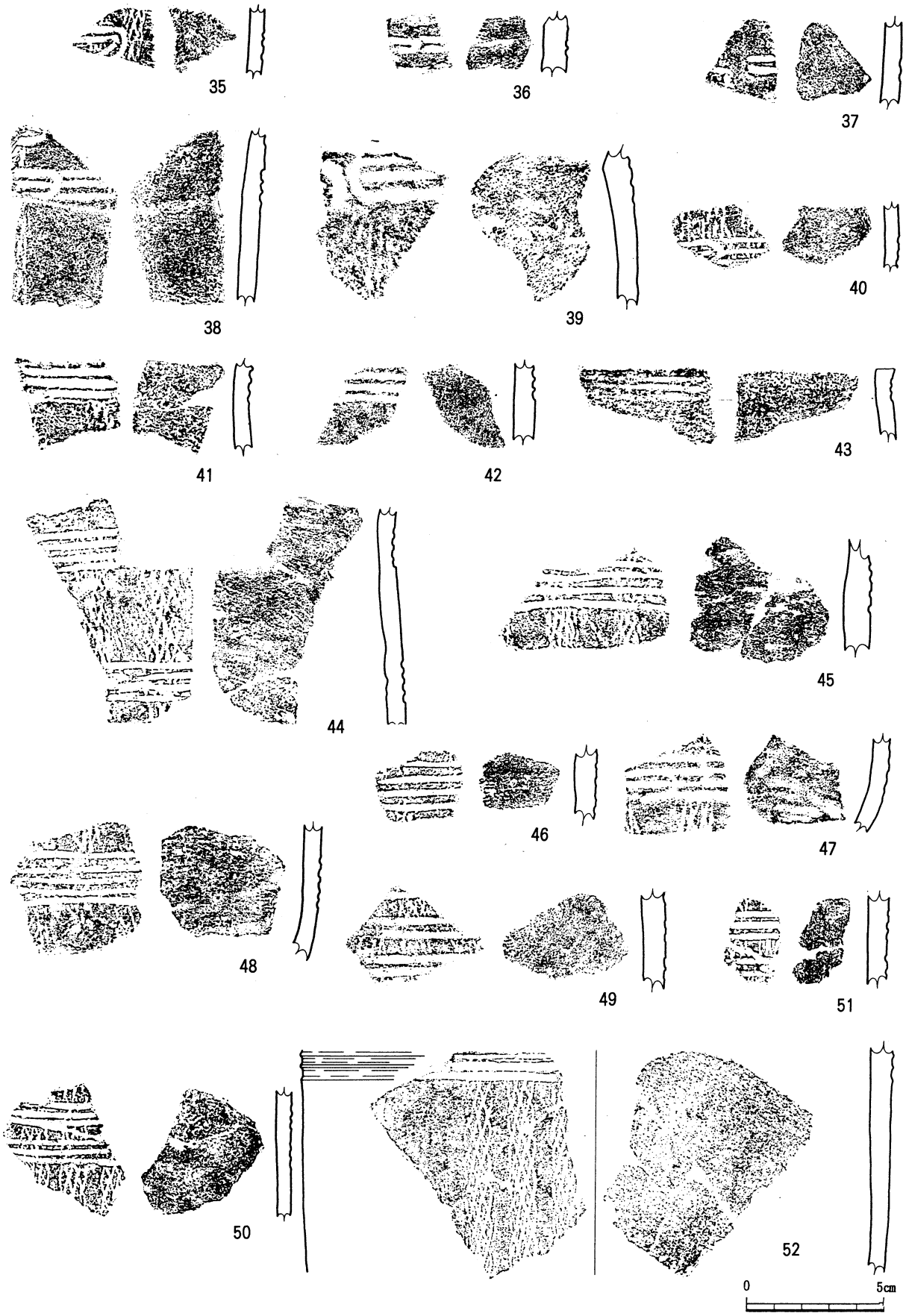
35～79は，胴部の破片である。器形は若干ふくらみをもった円筒形で，文様は網目状撚糸文を施文後，数条の並行沈線を巡らすものがほとんどである。器壁は5㎜～8㎜程度で，薄く精緻なものである。焼成は良好で，胎土には石英・長石・角閃石を含む。まれに金雲母を含むものもある。35～37は2本単位の並行沈線が巡っている。35は網目状撚糸文を施文後，横位に巡る2本単位の並行沈線が，弧を描いて反転している。36は上下の沈線を右回りの円弧でつないでいる。38～43は，3本単位の並行沈線が巡るものである。38～40では，外側同士（一段目と三段目）の沈線を円弧でつなぎ，39は右回りの円弧と左回りの円弧が対称となり，x字状になっている。44～47は4本単位の沈線が巡るものである。44はまず網目状撚糸文を縦位に施文し，その端部をナデ消して無文帯を作っている。その上から4本単位の並行沈線を，5㎝間隔で横位に2段巡らせている。撚糸文原体の巻きは，右巻き後左巻きしたものである。器壁は約7㎜で，外面の器面調整はていねいなナデ，内面はヘラ削りのあとが観察される。焼成は大変良好で精緻な土器である。45は交互巻きした原体を使用している。47は底部近くの破片であるが，4本単位の並行沈線の二段目と四段目が円弧で結ばれている。48は5本単位の並行沈線である。49は2本単位の並行沈線を，約6㎜の間隔で三段に巡らせている。50・51は3本単位を二段に巡らせている。52～55は，破片のため沈線の本数が明確にできないものである。52は復元胴部径が21.4㎝を計るものである。原体（絡条体）の長さが約1㎝で，左巻き後右巻きした網目状撚糸文を，縦位に約5㎜間隔で3条施文し，一つの撚糸文帯を構成している。そして約3㎝の無文帯をあけて，次の撚糸文を施している。その上から，3本以上の並行沈線を横位に巡らせているものである。胎土には金雲母を含んでいる。53は復元胴部径14.4㎝を計るものである。縦位に施された撚糸文の間隔は一定でない。原体の長さは約1㎝であり，原体の軸に巻かれた撚糸は，他に比べて細いものである。73と同一個体と考えられる。並行沈線は胴部の一番ふくらんだ中央部分に巡らされている。54は原体の長さが約1.1㎝であり，網目状撚糸文の交点の反復間隔から算出した原体の太さは約3.5㎜である。同様にして57の原体の太さは約4.6㎜，58は約3.8㎜である。59は44と同様に撚糸文の端部をナデ消して，無文帯を作っている。60～78は縦位の網目状撚糸文が施されている。60は52と同一個体である。65・66は原体の長さは約8㎜である。72は幅2㎝程の撚糸文帯であるが，長さ約8㎜の原体を隣



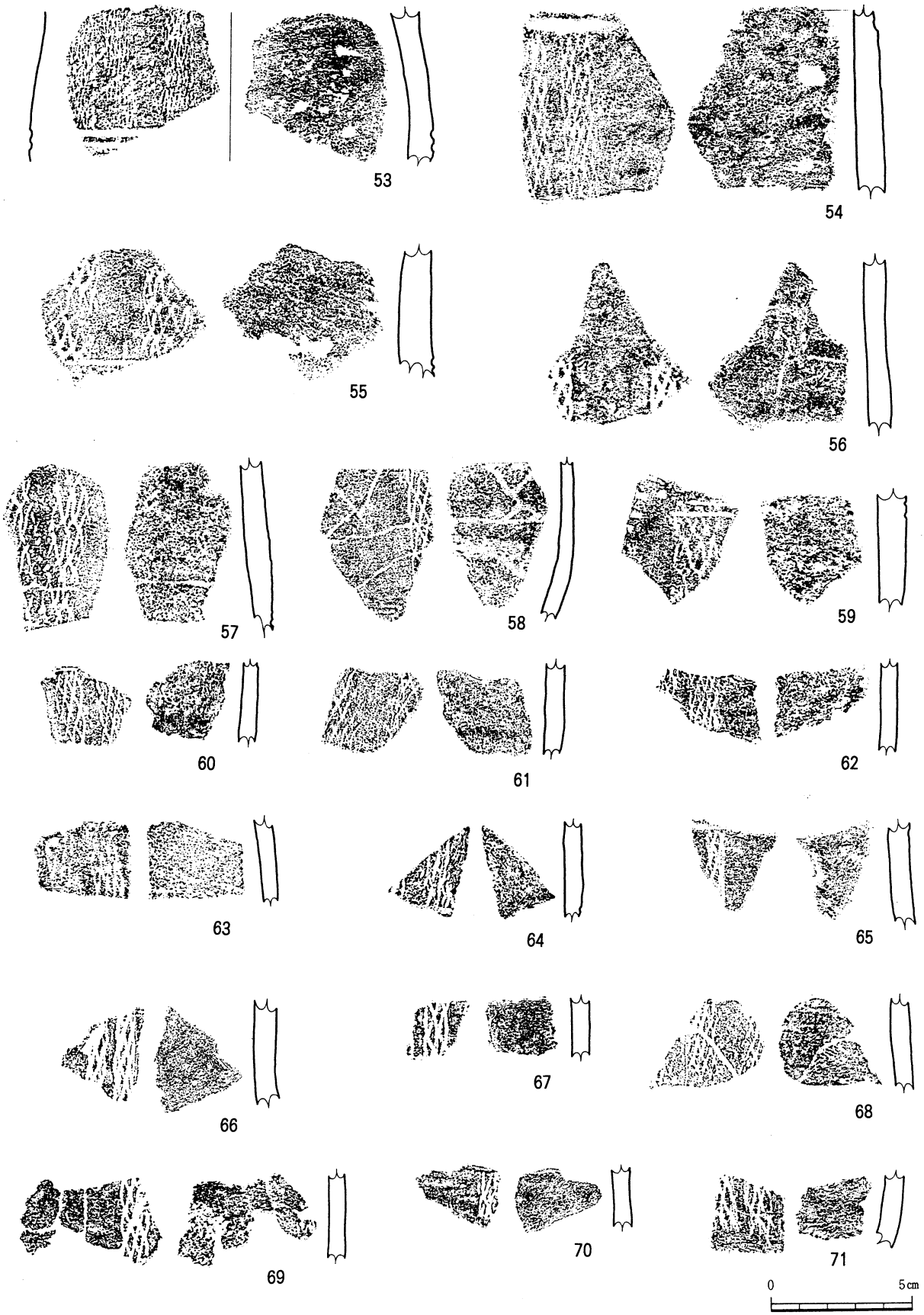
第11図 出土土器実測図 （1）



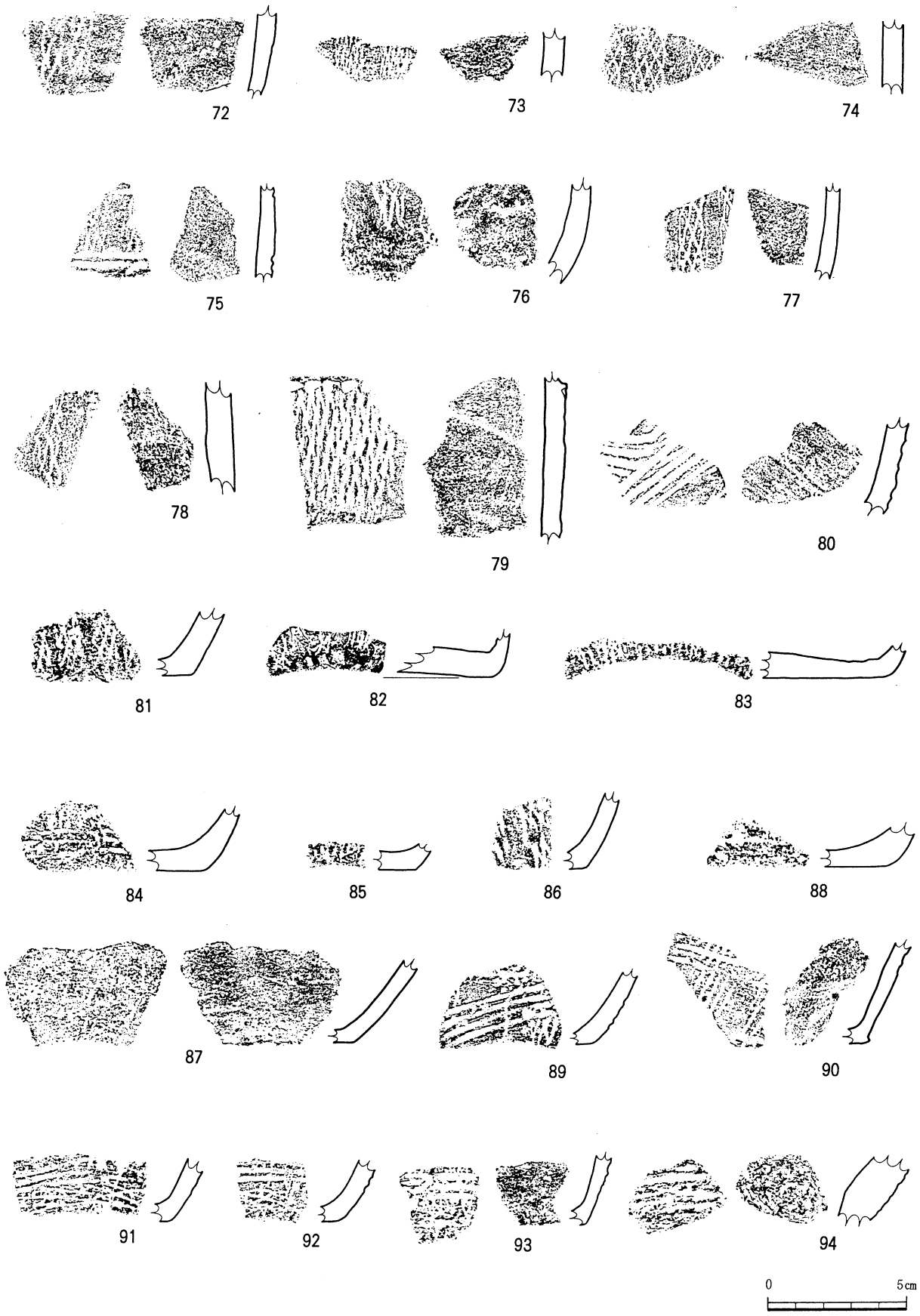
第12図 出土土器実測図 （２）



第13図 出土土器実測図 （3）



第14図 出土土器実測図 （4）



第15図 出土土器実測図 （５）

接して施文していると考えられる。74の原体の長さは約12㎜，原体の太さは約2.7㎜と細いものである。76と77の原体の巻きは交互巻きである。79はやや太めの撚糸（条）を，間隔を狭めて軸に巻きつけた原体（絡条体）を用いている。それを縦位に隣接して繰り返し施文し，幅広の撚糸文帯を作っている。そして横位の沈線文の下位には，刺突連点文を施している。外面にはススの付着が認められる。80は４本単位の並行沈線で曲線文を施文後，それに一部重なるように斜位に直線文を描くものである。曲線文を描くのはこの１点のみである。

81～93は，底部の破片である。いずれも平底を呈し，やや上げ底になるものもみられる。81は原体の長さが９㎜ほどの網目状撚糸文を，縦位に３条施文している。82はわずかに上げ底を呈するものである。胎土のきめが細かく，混入鉱物の判別が難しい。83は底面がていねいなナデ調整されている。84は縦位の撚糸文を施した後，底部側面に３本単位の浅い並行沈線文を巡らせている。87は無文の底部破片であり，胴部の張りが他よりやや強いものと考えられる。胎土には金雲母を含んでいる。89は縦位の撚糸文を施文後，４本単位の沈線文を斜位に施している。90は右上がりの沈線文を施文後，右下がりの沈線文を交差させて施文している。底面端部には小さな張り出しを持っており，胴部の立ち上がりは直線的である。91～93は，底部側面に横位の網目状撚糸文が施されるものである。91は底部側面に網目状撚糸文が横位に巡らされ，その上位に浅い沈線文がやや斜位に施されたものである。92・93は縦位の撚糸文を施文後，底部側面に横位の撚糸文を巡らし，その上位に並行沈線を施文したものである。92は２本の並行沈線であり，93は３本単位の並行沈線で外側の２本を弧で結んでいる。胎土には金雲母を含んでいる。

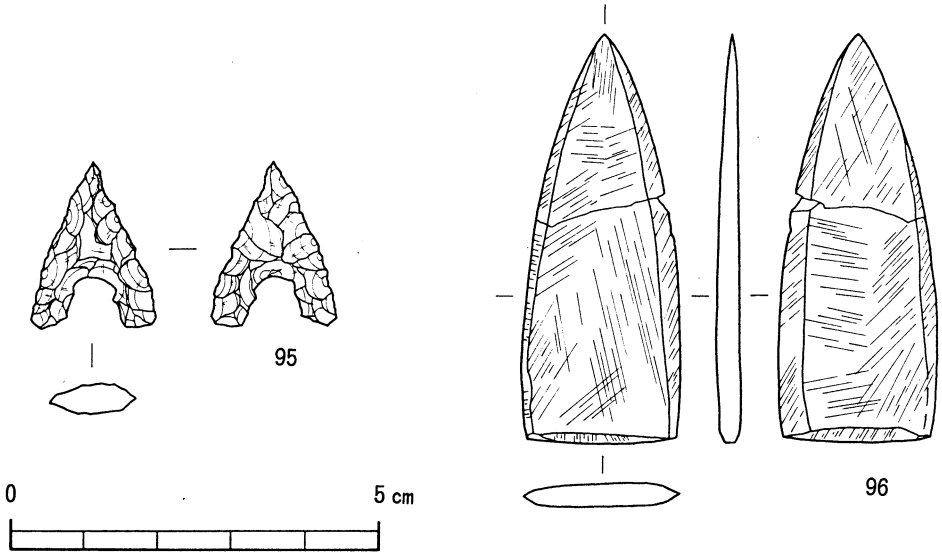
その他の土器（第15図94）

94は厚手の土器で，器壁は約1.4㎝である。外面に貝殻条痕が施されている。胎土には石英・長石・角閃石を含み，色調は赤茶褐色を呈する。１点のみの出土であるが，Ⅰ～Ⅲ類土器とは異質であり，その他の土器とした。

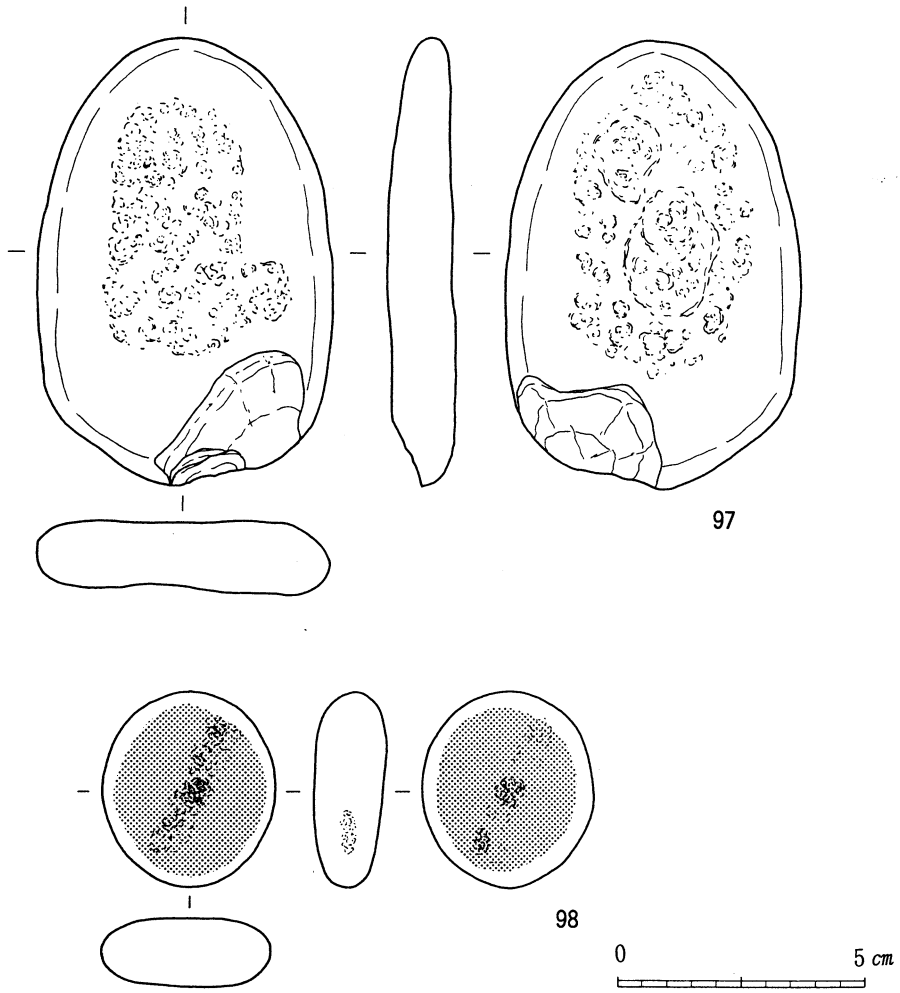
(2) 石器（第16～17図95～98）

Ⅳ層からは打製石鏃と磨製石鏃，石皿，磨石・敲石が出土している。その他，包含層中には砂岩の角礫などの散布が見られ，中には加熱を受けて赤化したものも見られた。

95は打製石鏃である。抉りの深い凹基式で，石材はチャートである。長さは2.3㎝，幅1.7㎝である。96は磨製石鏃である。長さ5.5㎝，幅2.2㎝を測る大型のものであり，全体を入念な研磨で仕上げている。厚さは約３㎜であるが，先端に向けて薄く研磨し，鋭い先端部を作出している。両側縁は幅１～３㎜を研ぎ分けて，鋭い刃部に仕上げている。基部は平基に近いが，若干のふくらみを持っている。刃部と同様に表裏から研ぎ分けているが，鋭い刃部状にはなっておらず，端部は平面に研磨して仕上げている。石材は頁岩である。また95と96は，４区の北側から隣接して出土している。97は小型の石皿である。磨滅面は不明確であるが，両面ともに中央が浅く窪んでおり，敲打痕が残る。98は磨石・敲石である。径８㎝のほぼ円形をしており，両面が磨滅している。また浅い敲打痕が線状に残されている。側面にも一部敲打痕が観察される。



第１６図　出土石器実測図（１）　打製石鏃　磨製石鏃



第17図 出土土器実測図　（２）　石皿 磨石

第３表　　遺物観察表（１）

遺物番号	挿図	類別	出土区	層	胎　　土	焼成	色調	文　様	拠り	巻き方	長さ㎜	直径㎜	注記番号
1	11	Ⅰ	3	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文・連点文					631
2	11	Ⅱ	4	Ⅳ	石英・長石・金雲母	良	茶褐色	連続貝殻刺突文					565
3	11	Ⅱ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	連続貝殻刺突文					174
4	11	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石・金雲母	良	明茶褐色	沈線文・刻目					445
5	11	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文・刻目					406
6	11	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石・赤色鉱物	良	赤茶褐色	沈線文・刻目					311
7	11	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文					159
8	11	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・金雲母	良	明茶褐色	沈線文					137
9	11	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石・やや粗	良	茶褐色	沈線文・刻目					261
10	11	Ⅲ	3	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文					192
11	11	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文					156
12	11	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文					441
13	11	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	明茶褐色	沈線文					21
14	11	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文					301
15	11	Ⅲ	3	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	赤茶褐色	沈線文					199
16	11	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	赤茶褐色	沈線文・網目状撚糸文					391
17	12	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	やや良	暗茶褐色	沈線文					36
18	12	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	やや良	茶褐色	沈線文					249
19	12	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文					317
20	12	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文					31
21	12	Ⅲ	4	Ⅳ	石英・長石・角閃石	やや良	明茶褐色	沈線文					550
22	12	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・金雲母	良	暗褐色	沈線文					315
23	12	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・金雲母	良	茶褐色	沈線文					313
24	12	Ⅲ	4	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	明茶褐色	沈線文					549
25	12	Ⅲ	4	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文					548
26	12	Ⅲ	3	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	明茶褐色	微隆突帯に刻目					627
27	12	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石・小礫	良	茶褐色						597
28	12	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色						229
29	12	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	明茶褐色						376
30	12	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	赤褐色	刻目					509
31	12	Ⅲ	4	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	明茶褐色	刻目					547
32	12	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色						517
33	12	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石	良	明茶褐色						50
34	12	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	明茶褐色	刻目					101
35	13	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石	良	暗茶褐色	沈線文・網目状撚糸文					542
36	13	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	明茶褐色	沈線文					185

第４表　　遺物観察表（２）

遺物番号	挿図	類別	出土区	層	胎　　土	焼成	色調	文　様	拠り	巻き方	長さ㎜	直径㎜	注記番号
37	13	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	明茶褐色	沈線文・網目状撚糸文					167
38	13	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	やや良	赤茶褐色	沈線文・網目状撚糸文					116
39	13	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	明茶褐色	沈線文・網目状撚糸文					617
40	13	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	やや良	赤茶褐色	沈線文・網目状撚糸文	R				457
41	13	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	明茶褐色	沈線文・網目状撚糸文					518
42	13	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文					228
43	13	Ⅲ	4	Ⅳ	石英・長石・角閃石・小礫	やや良	明茶褐色	沈線文					576
44	13	Ⅲ	3	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	暗茶褐色	沈線文・網目状撚糸文	ℓ	右巻き後左巻き			352
45	13	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	赤茶褐色	沈線文・網目状撚糸文	ℓ	交互巻き	11		594
46	13	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	赤茶褐色	沈線文・網目状撚糸文					414
47	13	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文・網目状撚糸文		左巻き後右巻き			619
48	13	Ⅲ	3	Ⅳ	石英・長石	良	赤茶褐色	沈線文・網目状撚糸文	ℓ				209
49	13	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文・網目状撚糸文					113
50	13	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石・金雲母	良	茶褐色	沈線文・網目状撚糸文	R	左巻き後右巻き	10		231
51	13	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	赤茶褐色	沈線文・網目状撚糸文	R				475
52	13	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・金雲母	良	茶褐色	沈線文・網目状撚糸文	R	左巻き後右巻き	15		41
53	14	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	暗茶褐色	沈線文・網目状撚糸文		左巻き後右巻き	10		386
54	14	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文・網目状撚糸文		左巻き後右巻き	11	3.5	112
55	14	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	暗茶褐色	沈線文・網目状撚糸文	R	左巻き後右巻き			24
56	14	Ⅲ	3	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	網目状撚糸文	L	左巻き後右巻き			59
57	14	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	網目状撚糸文	ℓ	交互巻き	13	4.6	288
58	14	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	やや良	暗茶褐色	網目状撚糸文	R	左巻き後右巻き		3.8	489
59	14	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	明茶褐色	沈線文・網目状撚糸文		交互巻き			625
60	14	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・金雲母	良	茶褐色	網目状撚糸文	R	左巻き後右巻き	10		3
61	14	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	網目状撚糸文		左巻き後右巻き			337
62	14	Ⅲ	3	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	赤茶褐色	網目状撚糸文	R	左巻き後右巻き	10		58
63	14	Ⅲ	3	Ⅳ	石英・長石・角閃石	やや良	茶褐色	網目状撚糸文		左巻き後右巻き？			666
64	14	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	暗茶褐色	網目状撚糸文		左巻き後右巻き？			161
65	14	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	暗茶褐色	網目状撚糸文		左巻き後右巻き	8		285
66	14	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石・小礫	良	暗茶褐色	網目状撚糸文	R	左巻き後右巻き	8		1
67	14	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	赤茶褐色	網目状撚糸文		左巻き後右巻き			307
68	14	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	赤褐色	網目状撚糸文	L	左巻き後右巻き			320
69	14	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・金雲母	良	暗茶褐色	網目状撚糸文	R	左巻き後右巻き	10		108
70	14	Ⅲ	3	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	赤茶褐色	網目状撚糸文		左巻き後右巻き			626
71	14	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	赤茶褐色	網目状撚糸文	L	左巻き後右巻き	9		259
72	15	Ⅲ	4	Ⅳ	石英・長石・角閃石・小礫	やや良	赤茶褐色	網目状撚糸文		左巻き後右巻き	8		664

第５表　遺物観察表（３）

遺物番号	挿図	類別	出土区	層	胎　土	焼成	色調	文　様	拠り	巻き方	長さ㎜	直径㎜	注記番号
73	15	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	暗茶褐色	網目状撚糸文		左巻き後右巻き	10		378
74	15	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	網目状撚糸文		左巻き後右巻き	12	2.7	362
75	15	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・金雲母	良	茶褐色	沈線文・網目状撚糸文		左巻き後右巻き			177
76	15	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	網目状撚糸文		交互巻き			398
77	15	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	暗茶褐色	網目状撚糸文	R	左巻き後右巻き			490
78	15	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	網目状撚糸文		交互巻き			190
79	15	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石	良	茶褐色			左巻き後右巻き	16		283
80	15	Ⅲ	4	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色						577
81	15	Ⅲ	3	Ⅳ	石英・長石・角閃石・小礫	良	明茶褐色	網目状撚糸文					647
82	15	Ⅲ	2	Ⅳ	精選された粘土	良	明褐色	網目状撚糸文					295
83	15	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	網目状撚糸文					122
84	15	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文・網目状撚糸文					277
85	15	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	撚糸文？					293
86	15	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	網目状撚糸文					189
87	15	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・金雲母	良	茶褐色						262
88	15	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石・小礫	良	茶褐色						279
89	15	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文・網目状撚糸文					465
90	15	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石・小礫	良	茶褐色	沈線文					448
91	15	Ⅲ	1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	良	茶褐色	沈線文・横位の網目状撚糸文		左巻き後右巻き			148
92	15	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・角閃石・金雲母	良	茶褐色	沈線文・横位の網目状撚糸文		左巻き後右巻き			178
93	15	Ⅲ	2	Ⅳ	石英・長石・金雲母	良	茶褐色	沈線文・横位の網目状撚糸文		左巻き後右巻き			264
94	15		1	Ⅳ	石英・長石・角閃石	やや良	赤茶褐色	貝殻条痕文					139

石　器

遺物番号	挿図	類別	出土区	層	寸法（縦×横cm）	重　さ	石　材	器　種	注記番号
95	17		4	Ⅳ	2.3×1.7	1.12ｇ	チャート	打製石鏃	663
96	17		4	Ⅳ	5.5×2.2	4.84ｇ	頁　岩	磨製石鏃	662
97	17		2	Ⅳ	18.2×11.9	885ｇ	砂　岩	石皿	609
98	17		2	Ⅳ	7.9×7.0	235ｇ	砂　岩	磨石・敲石	409

2．表層（旧耕作土）出土の遺物

土器（第18図99～105）

99～104は，縄文時代晩期に属する土器である。99は一湊式土器の口縁部である。波状口縁を呈する土器で，口唇部に斜位の刻目を施し，内面には連点文を施したものである。胎土には石英・長石・金雲母を含み，器面調整は条痕状のハケ目が観察される。色調は黒褐色であり，外面にはススの付着が認められる。100・101は黒川式土器の浅鉢である。100は大きく開いた胴部が頸部で屈曲する部分であり，101は丸みを帯びた胴部から頸部にかけての破片である。両者ともていねいなヘラ磨きが施されている。102•103•104は粗製の深鉢である。102は胴部の屈曲部分である。103と104は同一個体と考えられ，胴部から底部近くにかけてのものである。器面の調整は刷毛目のあとをナデており，胎土には石英・長石・角閃石・金雲母を含んでいる。

105は小さな鍔状の突帯を持つ土器で，突帯の下には沈線が施されている。小片のため全体の形状は明らかでないが，弥生土器と考えられる。

石器（第19図106～112）

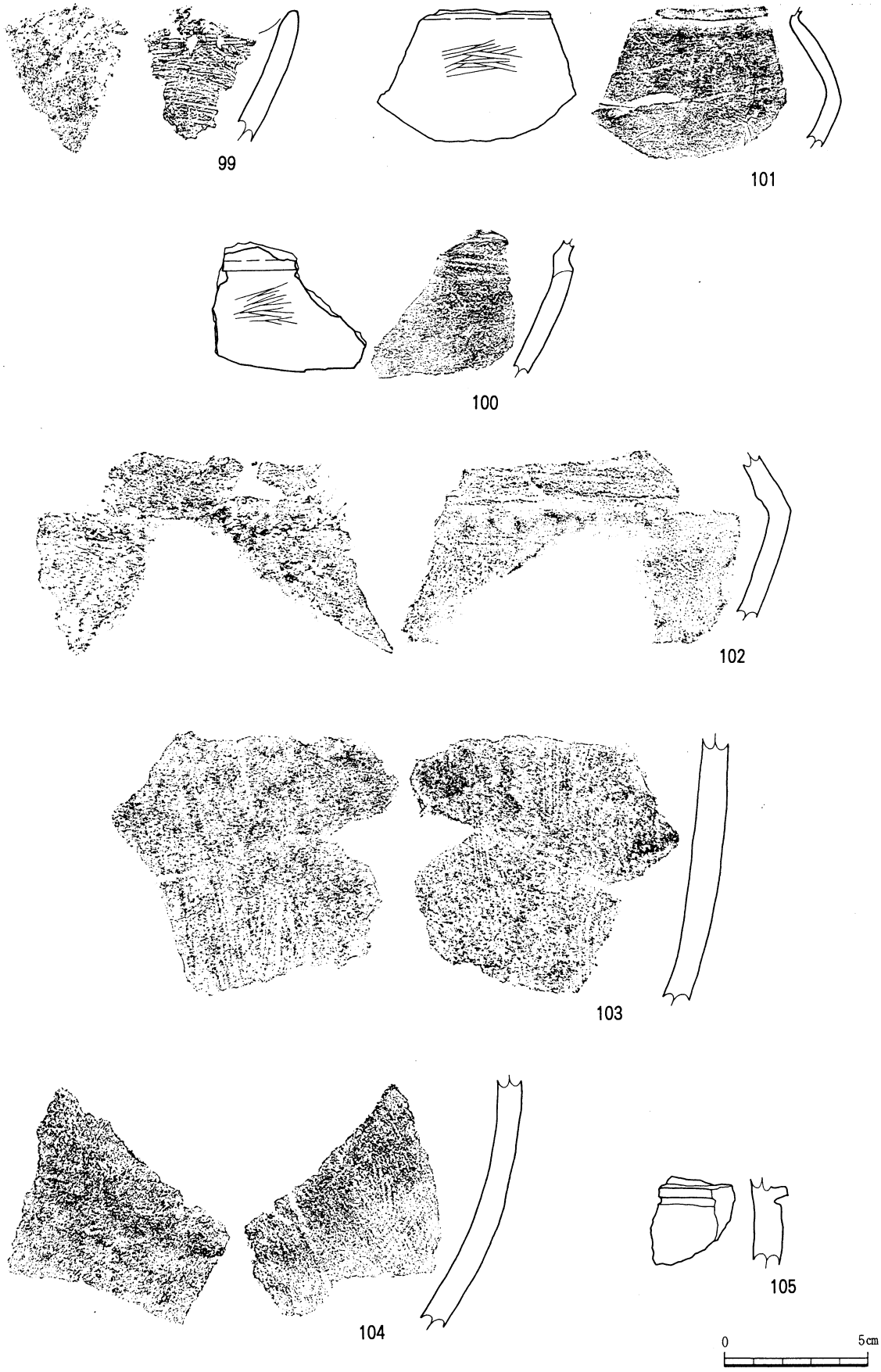
106～109は打製石斧である。106は自然面を残す剥片を使用し，両側辺にくびれをもたせるように整形剥離を施している。刃部は片側により多くの剥離が施され，片刃的な様相を呈す。また刃先は使用によると考えられる磨滅が観察され，丸みを帯びている。石材は砂岩である。107•108も自然面を残すものである。途中で折れており，全体の形状は明らかでない。砂岩製である。109はやや厚手の素材に整形剥離を施し，細身のバチ形となっている。両側辺は一部敲打されており，磨製石斧の製作途上の可能性もある。石材は砂岩である。

110～112は磨石類であり，磨石・敲石・凹石としての様相を併せ持つものである。110は片面に細長い凹みが，斜めに列を成すように集中している。112も同様な凹みが，より長く大きく残されており，凹みの中は敲打を重ねたあとが残っている。また側面にも敲打痕が観察される。磨滅面はあまり明瞭でない。111は両面が磨滅しており，片側の中央に浅い敲打痕が残されている。いずれも砂岩製である。

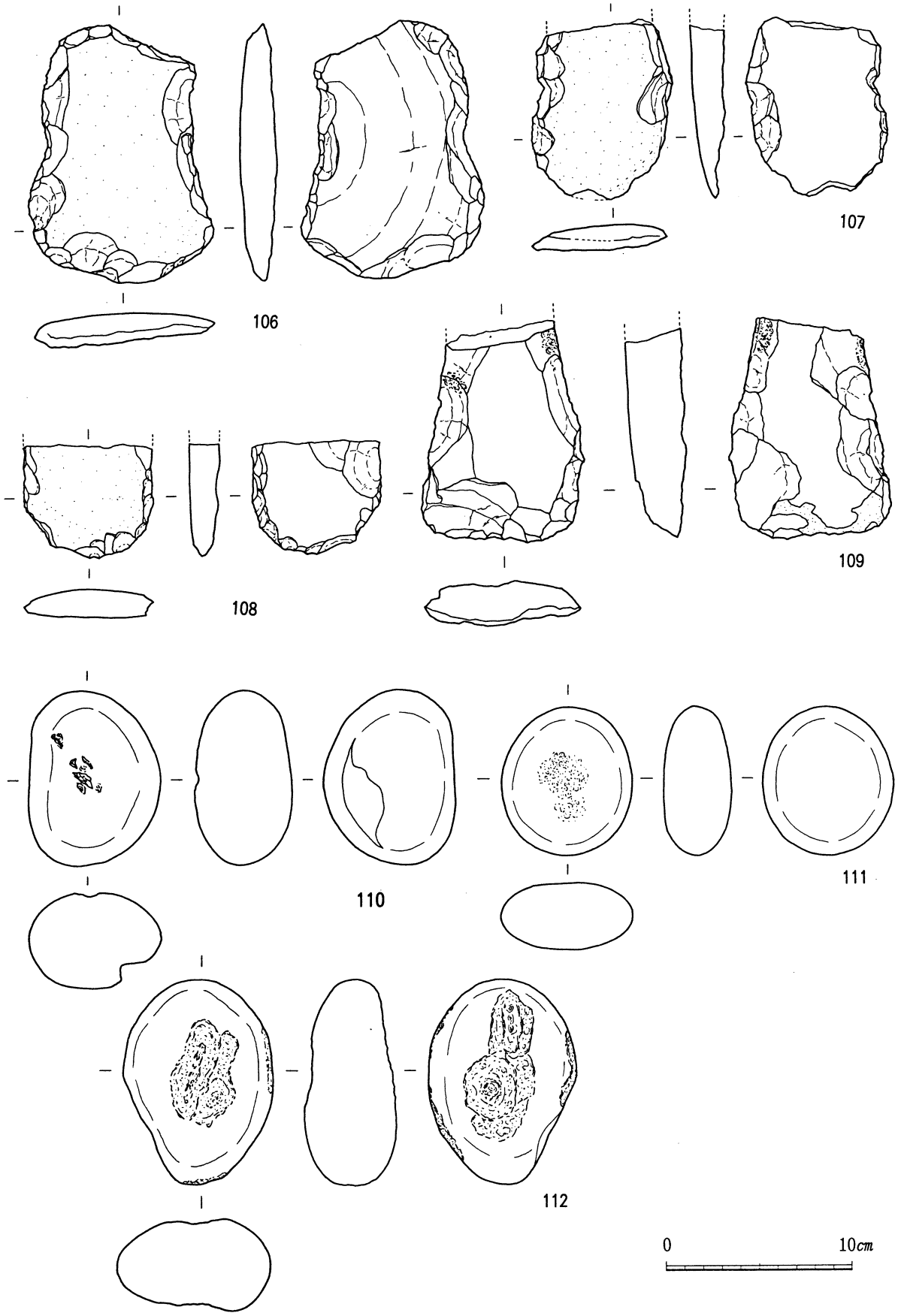
第6表　遺物観察表（4）

遺物番号	挿図	出土区	層	胎　土	焼成	色調	備　考	注記番号
99	18		1b	石英•長石•金雲母	やや良	黒褐色	一湊式土器•外面スス付着	175
100	18		1b		良	茶褐色	黒川式土器浅鉢	529
101	18		1b		良	暗茶褐色	黒川式土器浅鉢	56
102	18		1b	石英•長石•角閃石•金雲母	良	暗褐色	黒川式土器深鉢	536
103	18		1b	石英•長石•角閃石•金雲母	良	暗茶褐色	黒川式土器深鉢•外面スス付着	183
104	18		1b	石英•長石•角閃石•金雲母	良	暗茶褐色	№103と同一•外面スス付着•傾き不明	180
105	18		1b	石英•長石•金雲母	良	暗茶褐色	弥生土器？	77

石器				寸法（縦×横cm）	重　さ	石　材	器　種	注記番号
106	19		1b	13.9×9.9	370 g	砂　岩	打製石斧	表
107	19		1b	(9.8)×7.7	(180 g)	砂　岩	打製石斧	79
108	19		1b	(6.1)×7.0	(100 g)	砂　岩	打製石斧	69
109	19		1b	(12.0)×8.8	(450 g)	砂　岩	打製石斧	78
110	19		1b	9.4×7.2	470 g	砂　岩	磨石•敲石	172
111	19		1b	7.0×8.1	280 g	砂　岩	磨石•敲石	2
112	19		1b	8.1×11.0	590 g	砂　岩	磨石•敲石	564



第18図 出土土器実測図 （6）



第19図 出土石器実測図 （3）

第4章　まとめ

本遺跡で出土した土器は，器形的にはほぼ同じ形態を示すものと考えられ，平底の底部から円筒形の胴部となり，頸部で「く」の字に屈曲し，口縁部はラッパ状に外反するものである。

Ⅰ類土器は，１点のみの出土であるが，波状の沈線と連点文の様子から，平栫式土器であると考えられる。

Ⅱ類土器は，貝殻文系の塞ノ神式土器である。

Ⅲ類土器は，本遺跡の主体を成すものである。河口貞徳氏の分類（河口1972）では，塞ノ神式のＡａ式の範疇に入るものであり，新東晃一氏の分類（新東1989）では，平栫式土器様式の中の石坂上式あるいは栫ノ原式に相当するものである。

口縁部の文様は，棒状の施文具で２本単位の沈線文を数条巡らすもの，多条の沈線文を巡らすもの，沈線文を幾何学的に施文するもの，または無文のものなどがある。口唇部には刻目を羽状に施している。胴部の文様は，網目状撚糸文を縦位に施し，その上から横位に数条の沈線文を巡らすものである。撚糸文は，３～４条を間隔を空けずに重ねて施文して幅広い文様帯を作り，無文帯を空けてまた文様帯を施文するものや，３～４条ごとに間隔を変えて施文し，それをひとつの文様帯としているものがある。これらは新東晃一氏の分類された石坂上式土器にあたるものと考えられる。また等間隔の撚糸文に，３本単位の沈線文を巡らすという栫ノ原式土器も含まれている可能性があるが，破片のみのため不明確である。沈線文は頸部，胴部中央，底部側面に巡らされている。

また底部側面には，沈線文に加えて，網目状撚糸文を横位に巡したもの（第15図91, 92, 93）が出土している。これまであまり出土例の知られていない資料であるが，近年国分市の上野原遺跡（現在整理作業中）から類例が出土しているそうである[1)]。

撚糸文原体については，単軸絡条体第５類に分類されるものであり，網目状撚糸文が施文されるものである。個別の詳しい観察は遺物観察表に記したが，土器表面の風化等により，文様がはっきり観察できない資料もあり，土器総数94点のうち，35点について確認することができた。撚糸の撚りは，ℓ・Ｒ・Ｌがそれぞれ確認された。軸への巻き方については，左巻き後右巻きするものが最も多く，35点中29点を数えた。それに対し右巻き後左巻きしたものは１点しかなく，これは牛之原遺跡の特徴的な傾向ととらえることができる。交互巻したものは５点であった。またそれぞれの巻き方における撚りの具合は，別表１に示したとおりである。撚り方が判別できない資料が多いが，Ｒの撚糸を左巻き後右巻きしたものがやや多い傾向にあるようである。

別表１　絡条体の巻き方と撚り

巻　き　方	個数	撚り	内数
右巻き後左巻き	1	ℓ	1
左巻き後右巻き	29	R	9
		L	3
		不明	17
交互巻き	5	ℓ	2
		不明	3

絡条体の大きさは，長さが８㎜～16㎜であり，最も多い長さは10㎜であった。これは軸に撚糸が巻かれた幅であるので，実際の絡条体はもう少し長いものと思われる。また撚糸が巻かれた状態での直径は，2.7㎜～4.6㎜であった。平均は

3.65㎜である。撚糸の太さもいろいろあり，第14図53などはかなり細い撚糸を使用していた。

これら塞ノ神式土器は，種子島においては現在13か所の遺跡から出土している。

別表２　種子島出土の塞ノ神式土器（新東1992より）

遺　　跡	所　在　地	出　土　土　器	文献
赤木遺跡	西之表市現名	栫ノ原式土器	(1)
新城出口遺跡	西之表市新城	塞ノ神式土器	(2)
深川遺跡	西之表市住吉	塞ノ神式土器	(2)
牛之原遺跡	中種子町増田	塞ノ神式土器	(2)
千草原遺跡	中種子町増田	塞ノ神式土器　鍋谷式土器　木佐貫原式土器　栫ノ原式土器	(2)
高峯遺跡	中種子町野間	塞ノ神式土器	(2)
竹屋野遺跡	中種子町野間	塞ノ神式土器	(2)
満足山遺跡	中種子町野間	塞ノ神式土器	(2)
田島遺跡	中種子町田島	塞ノ神式土器	(2)
輪之尾遺跡	中種子町田島	三代寺式土器　塞ノ神式土器　鍋谷式土器　木佐貫原式土器	(2)
赤石牟田遺跡	南種子町長谷	木佐貫原式土器　石坂上式土器	(3)
小牧遺跡	南種子町島間	石坂上式土器	(4)
田代遺跡	南種子町島間	塞ノ神式土器　鍋谷式土器	(2)

別表２のとおり，種子島は塞ノ神式系土器が比較的多く出土する地域であり，牛之原遺跡の隣の台地上に位置する千草原遺跡からも，多くの塞ノ神式系土器が出土している。また，南種子町の小牧遺跡（井ノ上1988）では，本遺跡に類似した塞ノ神式土器が出土しており，その施文原体についても詳しく観察されている。実見した範囲では，牛之原遺跡と共通点が見出せるようである。今後，それぞれの遺跡の分布や遺跡の立地・性格などを検討し，種子島という閉ざされた生活圏の中で，当時の人々の動きや生活の復元をしていく必要があろう。撚糸文原体の観察も，それに役立つものと考える。

その他の土器とした94は，器壁の厚さや胎土・調整などから，貝殻文系円筒土器に類似しているが，これ１点のみで他に出土がないので，ここでは型式不明の早期の土器としておく。

磨製石鏃について

牛之原遺跡からは，縄文時代早期の塞ノ神式土器に伴う磨製石鏃が１点出土した。これは長さ5.5㎝，幅2.2㎝の全磨製のものであり，両面を平坦に仕上げ，側縁は研ぎ分けて鋭い刃部を作出している。基部は若干のふくらみをもつものである。

南九州縄文時代早期の磨製石鏃に関しては，宮田栄二氏が集成をされている（宮田1994）。しかしその後に，種子島の奥ノ仁田遺跡から，縄文時代草創期の隆帯文土器に伴なって全磨製の石鏃が１点出土し，南九州の磨製石鏃の初現がさらに遡ることになった。今回は早期のものに限って，宮田氏集成のその後の出土資料を追加した地名表が第７表である。それによると南九州では早期前葉の前平式土器の段階で，多くの磨製石鏃が広く出土している。そして次に出土が見られるのが塞ノ神式土器の段階である。追加資料も合わせてみると，前平式土器段階のものが９遺跡29点，塞ノ神式土器段階のものが４遺跡６点出土しており，前平式土器段階のものが極めて多いことがわかる。

さらに宮田氏は，磨製石鏃の形態をⅠ・Ⅱ類に分類している。Ⅰ類は平基無茎式に分類されるもので，基部は直線的なものとわずかなふくらみをもち内湾するものが認められるとし，小

型のもの（ＩＡ類）と大型のもの（ＩＢ類）がみられるとされている。Ⅱ類は凹基無茎式に分類されるもので，基部の抉りは比較的浅いとされている。牛之原遺跡の磨製石鏃は，基部にややふくらみをもつ大型の全磨製石鏃であり，形態的にはＩＢ類に分類されるものと考えられる。

これまで出土した磨製石鏃を，各段階に分けて並べてみたのが第20図である。前平式土器段階で出土している１～４は，小型三角鏃でＩＡ類に分類されるものであるが，基部整形の技法など牛之原遺跡のものに共通しており，塞ノ神式土器段階まで製作技法の継続性が認められる。

５～８の荒田原遺跡出土のものは基部に浅い抉りが観察され，Ⅱ類に分類されるものと考えられる。これまでの出土資料では岩本遺跡出土の資料（第20図10）がⅡ類に分類されるが，基部の浅い抉りのほか，基部両端がやや広がる形状などが類似している。

以上，資料提示のみで十分な考察まで至らないが，草創期の隆帯文土器の段階で出現した磨製石鏃が，前平式土器段階になると確実に南九州各地に広く分布し，それが塞ノ神式土器の段階まで確実に継続するということ，そして塞ノ神式土器段階でも小型の正三角形状の石鏃と大型のものが両者存在しているということが，今回の発見によって明らかになったことを強調しておきたい。

第７表　南九州縄文早期の磨製石鏃出土地名表

	遺跡名	所在地	共伴土器	図番号	石材	文献
磨製石鏃	塚ノ越遺跡	吹上町	前平式	1，9	頁岩	(5)
	宇治野原遺跡	金峰町	前平式	2	頁岩	(6)
	岩本遺跡	指宿市	前平式	10, 11, 12	頁岩	(7)
	西丸尾遺跡	鹿屋市	前平式	3	頁岩	(8)
	榎崎Ｂ遺跡	鹿屋市	前平式	4	頁岩	(9)
	荒田原遺跡	田代町	前平式	5, 6, 7, 8	頁岩	(10)
	木落遺跡	金峰町	塞ノ神式	13	頁岩	(11)
	石ノ峯遺跡	南種子町	塞ノ神式	14, 15, 16	頁岩	(12)
	牛之原遺跡	中種子町	塞ノ神式	17	頁岩	(13)
局部磨製石鏃	榎崎Ｂ遺跡	鹿屋市	石坂式　塞ノ神式	18	頁岩	(9)
	打馬平原遺跡	鹿屋市	早期後半の土器	19	鉄石英	(14)
	妙見遺跡	えびの市	早期後半の土器	20	黒曜石	(15)

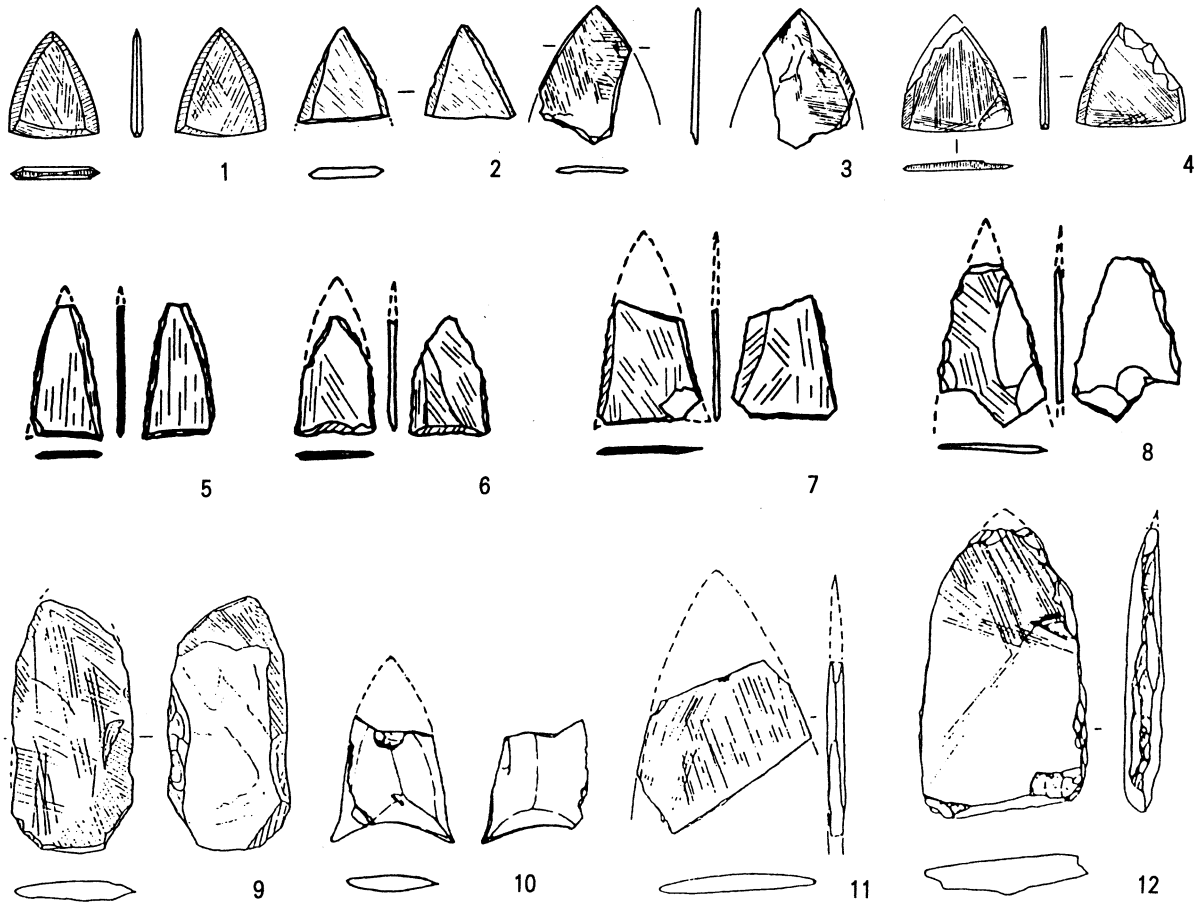
（追加資料）

宮田氏の集成の中では，上記の表にあげたものの他に，知覧町和田前遺跡と指宿市小牧３Ａ遺跡があげられている。その他，現在調査及び整理中のもので追加資料としては，

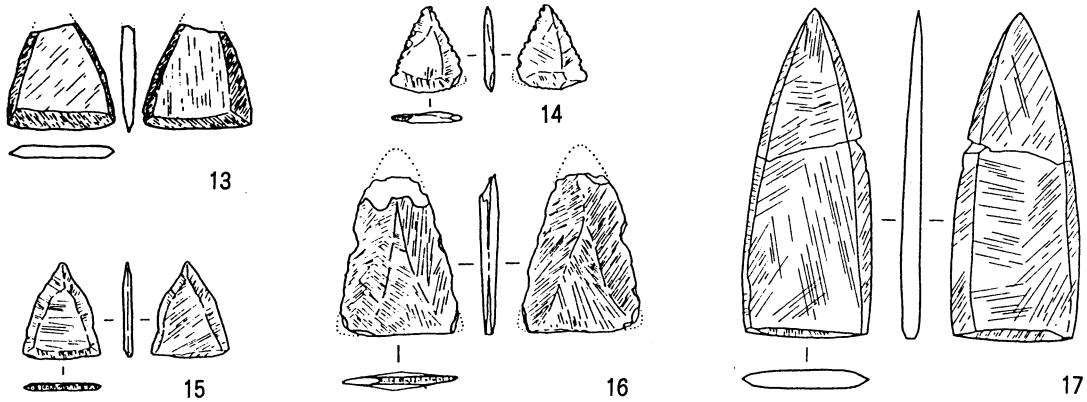
・松元町の前原遺跡[2]で，前平式土器に伴う磨製石鏃が11点
・吾平町原口ヶ岡遺跡[3]で，前平式土器に伴う磨製石鏃が５点
・西之表市の日守遺跡[4]で，円筒形土器に伴う磨製石鏃が１点
・中種子町の三角山Ⅱ遺跡[5]で，塞ノ神式期と思われる磨製石鏃が１点，局部磨製石鏃が２点

出土しているとのことである。

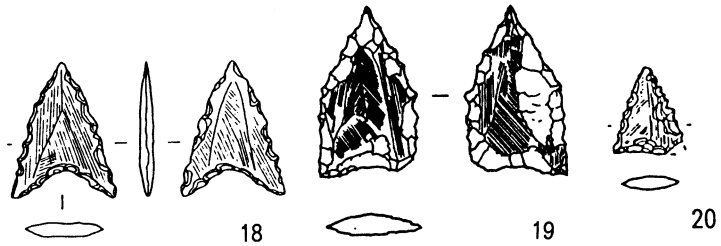
さらに種子島開発総合センターには，西之表市二本松遺跡採集の磨製石鏃が８点，局部磨製石鏃が１点展示されている[6]。これらは磨製であるということから，これまで弥生時代の石鏃であると考えられていた。しかし二本松



前平式土器段階の磨製石鏃　(1～12)



塞ノ神式土器段階の磨製石鏃　(13～17)



縄文早期の局部磨製石鏃　(18～20)

第20図　南九州縄文早期の磨製石鏃（80％縮小）

遺跡からは，縄文草創期の隆帯文土器や平栫式土器，轟式土器などが採集されており，弥生土器の散布は見られない。よって縄文の磨製石鏃が認知されるようになった現在では，二本松遺跡の磨製石鏃も縄文時代に帰属するものであるという可能性が強いと考える。

Ｖ層の黄褐色火山灰について

牛之原遺跡のＶ層は，アカホヤとＡＴ火山灰の間に堆積する，未詳の火山灰と考えられる層である。火山灰であるとすれば，今回の調査で，上層のⅣ層から縄文時代早期後葉の塞ノ神式土器が出土していることから，それより古い火山灰であることは明らかである。

これまで種子島においては，アカホヤとＡＴ火山灰の間には，火山灰は確認されていなかった。しかし牛之原遺跡の調査後，西之表市の安城地区に所在する日守遺跡の確認調査が行われ，相当する層位に，牛之原遺跡Ｖ層とよく似た火山灰が確認された。現地の土層を調査した成尾英仁氏は，新発見の未詳火山灰として「安城火山灰」の仮称を与えている[7]。また現在調査中の中種子町三角山Ｉ遺跡でも，アカホヤの下位に未詳の火山灰が確認され，その火山灰の下位から隆帯文土器が出土している[8]。層位的には薩摩火山灰（約11000年前）が想定されるが，これまでのところ薩摩火山灰の降灰が確認された範囲は，種子島の南南西に位置する三島村が南限である[9]。三島村と種子島は緯度的にはあまり変わらないので，種子島にも薩摩火山灰が降灰している可能性は考えられる。ただし牛之原遺跡でも全面に良好な堆積をしていたわけではなく，３～４区を中心に堆積している。日守遺跡でも１ヶ所のトレンチにのみ堆積が見られたとのことで，やや窪んだ地形などの限られた場所にしか良好には残存していない可能性が高い。

今回はＶ層の土壌サンプルは採取したものの，詳しい分析をすることができなかった。今後の調査では，理化学的な分析等により，火山灰を同定していく作業が必要になるであろう。

参考文献・引用文献

河口　貞徳1972　「塞ノ神式土器」　『鹿児島考古』第６号　鹿児島県考古学会

新東　晃一1989　「塞ノ神・平栫式土器様式」　『縄文土器大観』１

〃　1992　「島嶼の縄文早期土器の様相」　『南九州縄文通信』№６

井ノ上秀文1988　「小牧遺跡・平六間伏遺跡」　『南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』

宮田　栄二1994　「縄文早期の磨製石鏃」　『南九州縄文通信』№８

註)

１）中村耕治氏，八木沢一郎氏の御教示。

２）牛ノ濱修氏の御教示。

３）吾平町教育委員会川崎重治氏，弥栄久志氏の御教示。

４）種子島開発総合センター鮫島安豊氏の御教示。

５）調査担当者からの教示。

６）上村俊雄鹿児島大学法文学部教授の御教示。

７）「日守遺跡」発掘調査事業報告書　西之表市教育委員会1995.3
　成尾英仁氏（串木野高校），沖田純一郎氏（西之表市教委）の御教示。

８）「三角山遺跡への招待」現地見学者用資料　鹿児島県立埋蔵文化財センター　1995.5

９）奥野充氏（名古屋大学）の御教示。

資料報告文献

(1) 「下剥峯遺跡」『西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』 1978 西之表市教育委員会

(2) 「先史時代」『中種子町郷土誌』 1971,『南種子町郷土誌史』1987 盛園尚孝

(3) 「熊毛郡南種子町の遺跡について」『鹿児島考古』 第19号 旭慶男

(4) 「小牧遺跡・平六間伏遺跡」『南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』 1988 南種子町教育委員会

(5) 「塚ノ越遺跡ほか2遺跡」『吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』 1990 吹上町教育委員会

(6) 「宇治野原遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』 1992 金峰町教育委員会

(7) 「岩本遺跡」1978 指宿市教育委員会

(8) 「西丸尾遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(64)』 1992 鹿児島県教育委員会

(9) 「榎崎B遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(4)』 1993 鹿児島県立埋蔵文化財センター

(10) 「荒田原遺跡」『田代町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』 1995 田代町教育委員会

(11) 「木落遺跡・高源寺遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』 1991 金峰町教育委員会

(12) 「石ノ峯遺跡」『南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)』 1996 南種子町教育委員会

(13) 本報告「牛之原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(18)』 1996 鹿児島県立埋蔵文化財センター

(14) 「打馬平原遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)』 1988 鹿屋市教育委員会

(15) 「野久首遺跡・平原遺跡・妙見遺跡」『九州縦貫自動車道(人吉～えびの間)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』 1994 宮崎県教育委員会

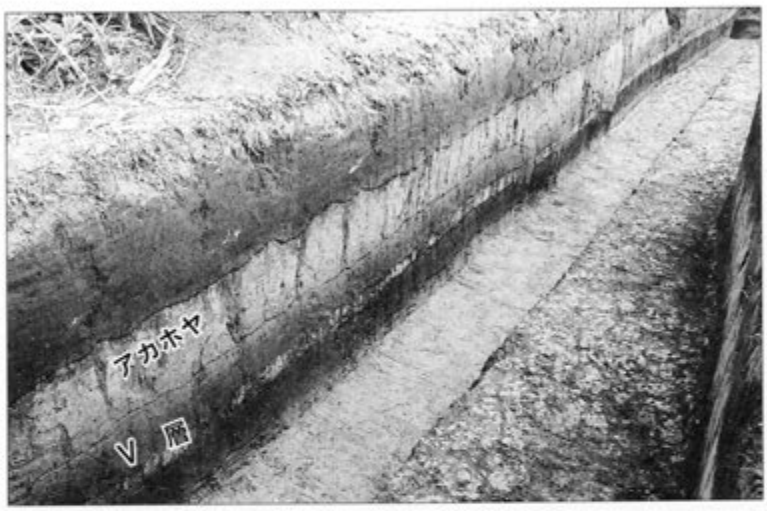
図　　版

遺跡遠景

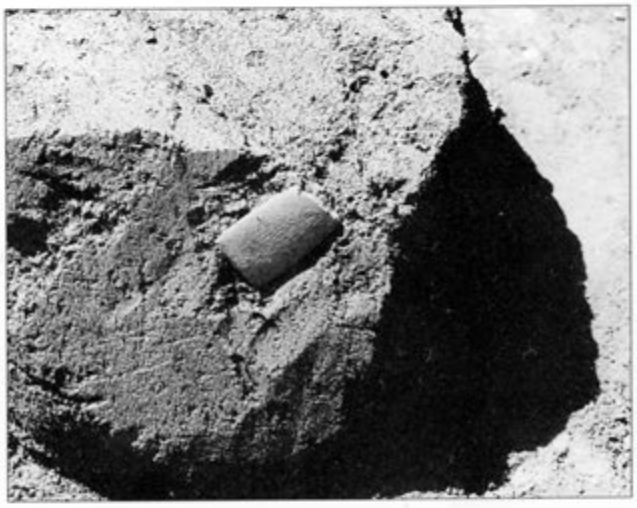
遺跡近景

発掘作業風景

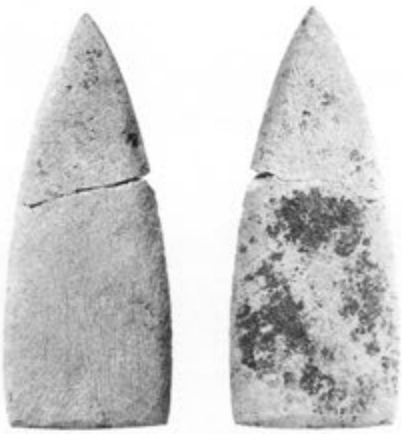
図版１　遺跡遠景・近景



土層堆積状況



磨製石鏃出土状況（基部）



95

磨製石鏃（現寸）

打製石鏃　96

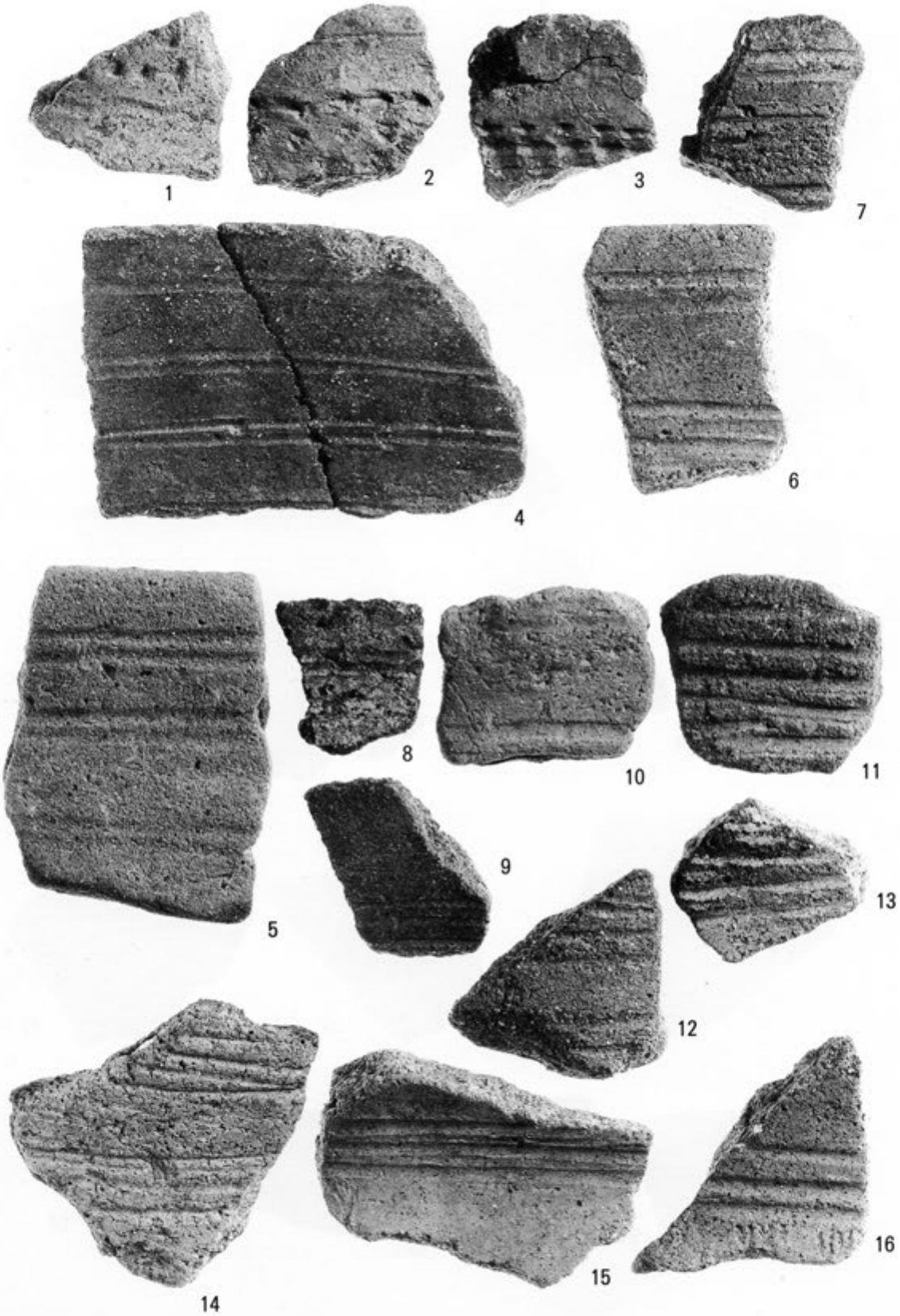
97

石　皿

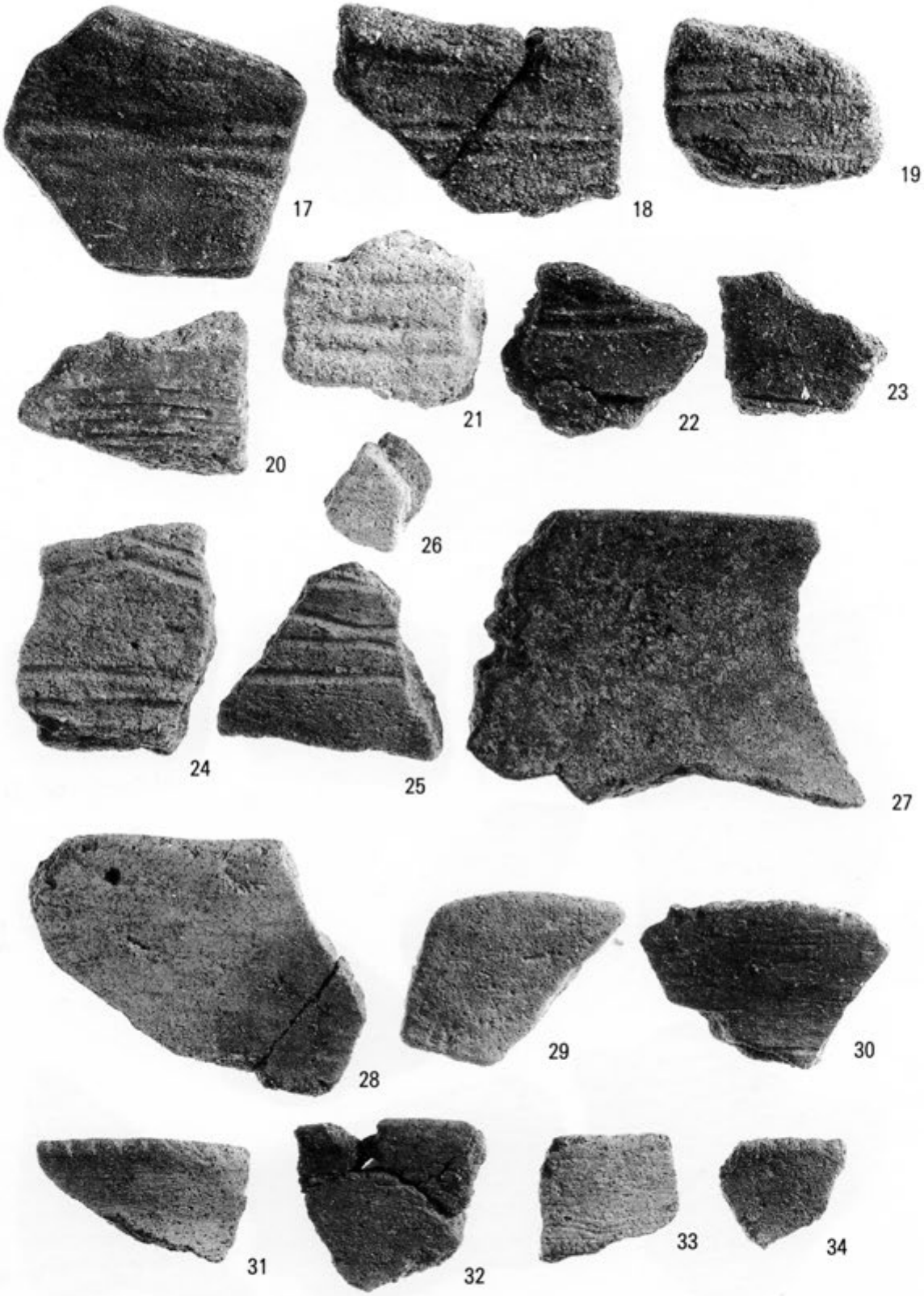
98

磨　石

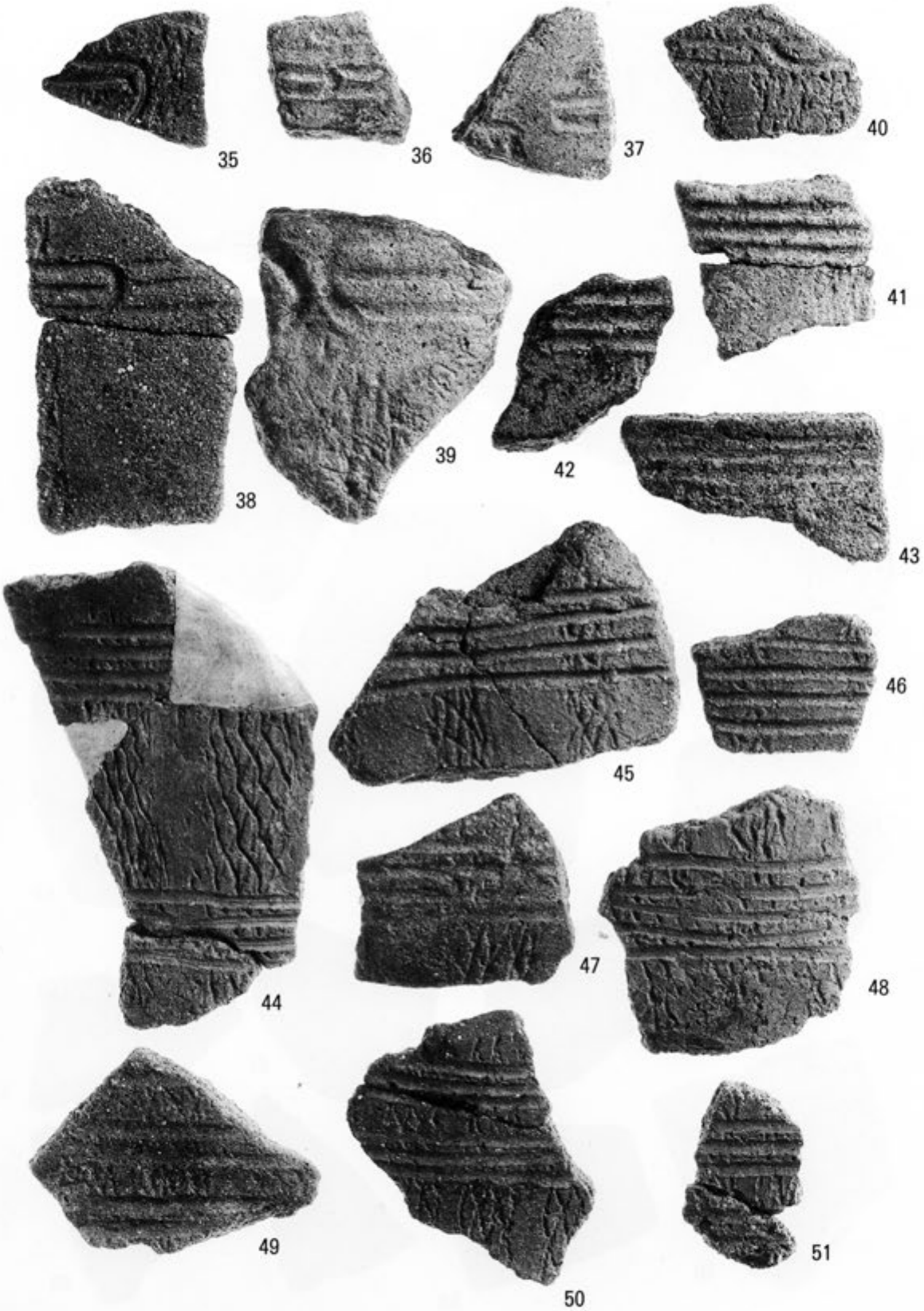
図版２　土層断面　出土遺物（１）



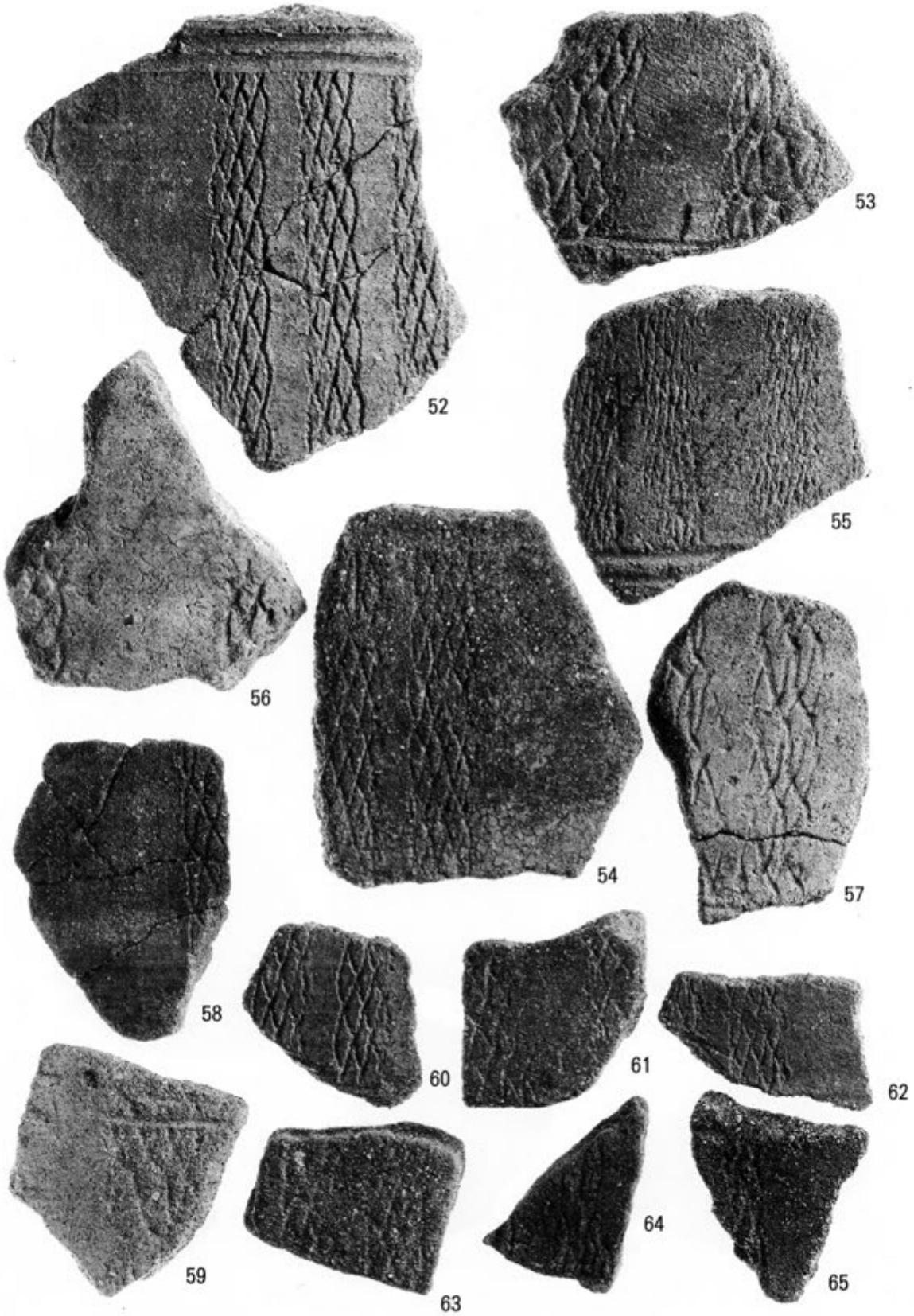
図版３　出土遺物（２）



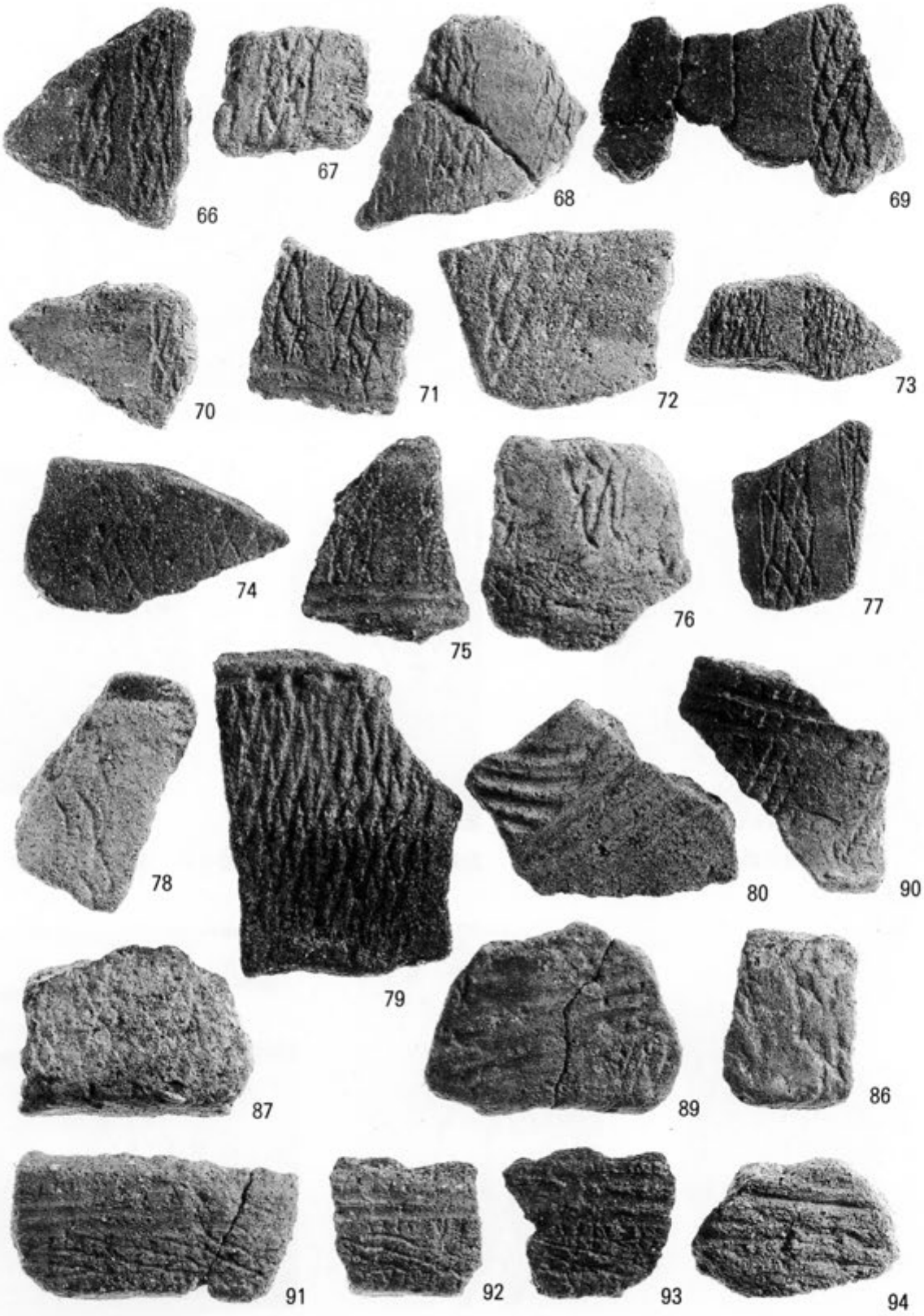
図版４　出土遺物（３）



図版５　出土遺物（４）



図版６　出土遺物（５）



図版７　出土遺物（６）

撚りℓ　右巻き後左巻き　44

撚りR　左巻き後右巻き　52

左巻き後右巻き　53

左巻き後右巻き　79

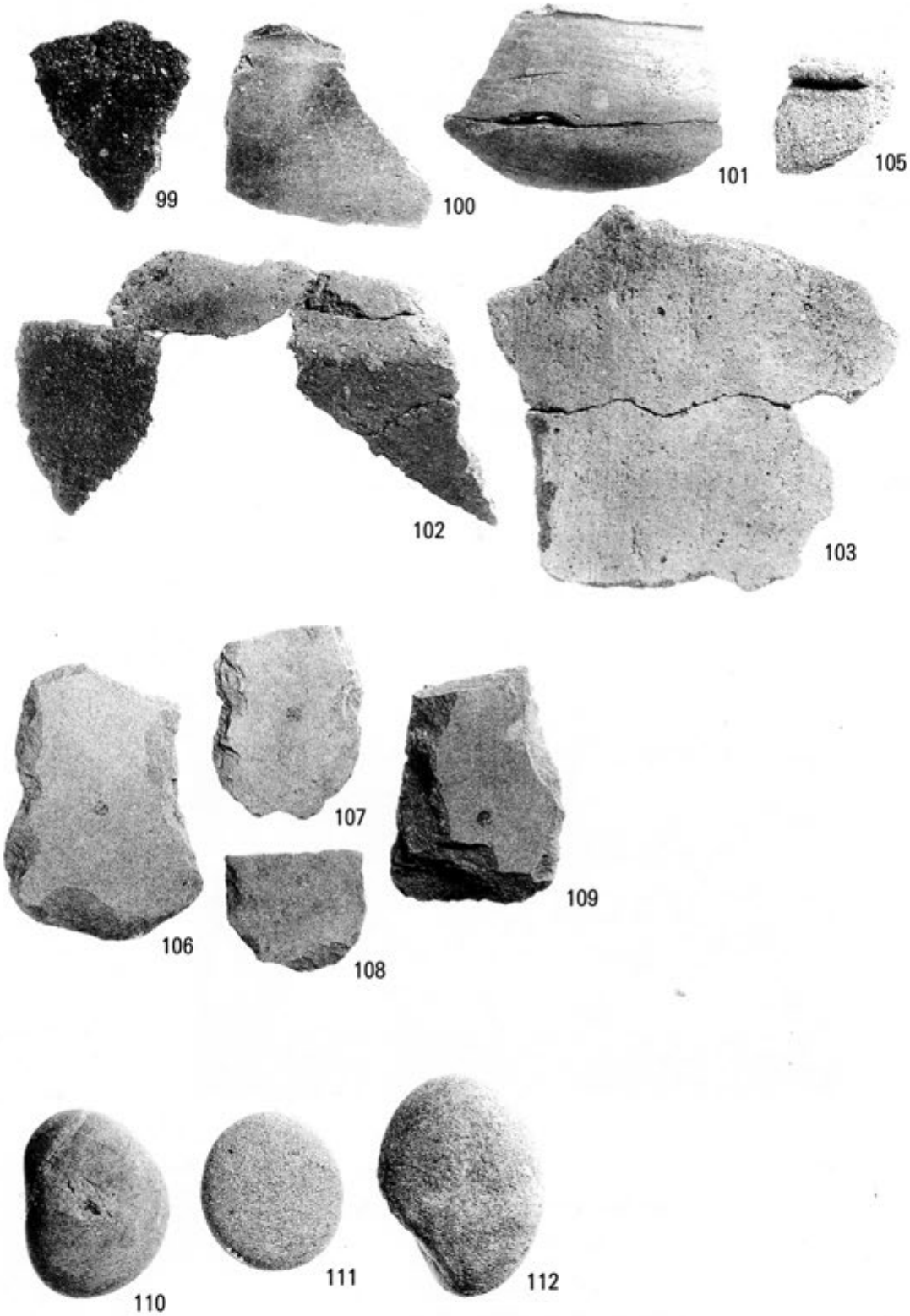
撚りR　左巻き後右巻き　73

撚りR　左巻き後右巻き　66

撚りℓ　交互巻き　57

撚りℓ　交互巻き　45

図版8　撚糸文　文様拡大図



図版 9　出土遺物（7）

あ と が き

種子島は，鉄砲伝来とロケット基地のある島として全国的に有名である。ここ牛之原の台地にも，ロケット追跡管制所があり，巨大な白いパラボラアンテナが，天を仰いで林立している。

まさに科学の最先端を感じさせる施設であるが，その足もとに眠っていた牛之原遺跡の技術も相当なものであった。縄文時代早期の層から出土した，全長5.5cmもある磨製石鏃は，当時の最先端技術であったろう。我々の認識を新たにしてくれた資料であった。

この磨製石鏃から約7000年後，種子島に鉄砲が伝わるまでは，狩猟や戦の道具として，縄文時代以来ずっと矢じりを付けた弓矢が使われてきたことを考えると，さらに感慨深いものがある。

あまり出ないと嘆いていた発掘作業員さんたちも，最後にこの磨製石鏃が出土したうれしさで，暑い夏の疲れも吹っ飛んだようだった。

本当にご苦労さまでした。

発掘作業員

有馬喜美枝，磯俣美津江，稲子美千代，牛原忍，宇都美子，宇都よしこ，奥田和子，奥田直治，門之園瀬津子，上敷領重俊，関憲子，園田エツ，橋野奈々子，蓮子よし子，羽生イツ子，春田政子，深田スミエ，古市靖子，前田カツ子，松下国夫，松下友子，峯下ナミ子，向井一男，向井トシ子，山下数代，和田則子，和田満博，岩屋三男，鎌田イツエ

整理作業員

川畑明子，前田秀子，伊口亮子，今村むつみ

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(18)

牛 之 原 遺 跡

1996年3月

発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-56 鹿児島県姶良郡姶良町平松6252
TEL 0995-65-8787　FAX 0995-65-8117

印刷　有限会社　梅　木　印　刷
〒899-54 鹿児島県姶良郡姶良町三拾町1888
TEL 0995-67-2256　FAX 0995-65-7992